

職業レディネス・テスト第3版の尺度の信頼性および
換算規準の妥当性に関する検討

独立行政法人 労働政策研究・研修機構
室山晴美

《 要旨 》

本研究は、2006年に公表されて以来、10年以上が経過した「職業レディネス・テスト第3版」について、職業興味、職務遂行の自信度、基礎的志向性を測定するための尺度としての信頼性および換算規準の妥当性の検証を目的として実施された。

2007年4月から2017年7月までに集められた中学生38,622名、高校生21,733名の職業レディネス・テストの回答記録を分析し、検査を構成する3つの下位検査「職業興味」、「職務遂行の自信度」、「基礎的志向性」の信頼性を因子分析により検討した。その結果、「職業興味」の2項目、「基礎的志向性」の1項目に関して尺度構成上のずれがみられたが、第3版と同一の項目を用いた測定尺度としての信頼性係数を算出したところ、第3版作成時と同程度の高い値が得られた。

換算規準の妥当性の検証では、各検査を構成する6つの職業領域と3つの志向性ごとに中学生、高校生男女別の平均値の水準と経年変化を検討した。年度をまとめた中学生、高校生の男女別平均値では、第3版と比較して、値が高めとなっている領域、低めとなっている領域がいくつかみられた。ただ、各領域、各志向性の平均値を2007年度から2017年度までの長期的な水準でみたところ、中学生女子の一部の職業領域で、若干ではあるが、近年徐々に上昇する傾向はみられたものの、それ以外については特徴的な大きな変化はみられなかった。

以上の結果を踏まえて職業レディネス・テスト第3版の信頼性、妥当性は維持されており、現時点において検査の全面改訂や見直しが必要となるほどの大きな問題点はなお、今回の分析の結果で尺度構成上のずれが見られた項目および第3版作成時の規準データの平均値の水準との間に差がみられた職業領域については、今後も継続的に観察していく必要がある。

(備考) 本論文は、執筆者個人の責任で発表するものであり、独立行政法人 労働政策研究・研修機構としての見解を示すものではない。

目 次

1. 問題・目的.....	1
2. 方法.....	4
(1) 分析に用いたデータ.....	4
(2) 職業レディネス・テストの尺度構成と採点方法、得点の換算について.....	5
3. 中学生データに関する検討結果.....	7
(1) データの特徴.....	7
(2) 各尺度の信頼性・妥当性の検証.....	10
(3) 下位尺度の規準得点の妥当性に関する検証.....	17
(4) 中学生の結果のまとめ.....	27
4. 高校生データに関する検討結果.....	27
(1) 学科構成からみた今回のデータの特徴とサンプリング.....	27
(2) 各尺度の信頼性・妥当性の検証.....	31
(3) 下位尺度の規準得点の妥当性に関する検証.....	37
(4) 高校生の結果のまとめ.....	45
5. 総合的考察.....	45
(1) 検査の構造に関する信頼性の検討.....	45
(2) 換算規準の妥当性の検討.....	47
(3) まとめと今後の課題.....	50
参考文献.....	53

1. 問題・目的

職業レディネス・テストは 1972 年に職業研究所によって初版が公表され、以来、中学生、高校生を中心とした若年者の職業意識の発達を調べるための検査として広く活用されてきた。この検査の一つの特徴は労働行政の所管の研究所が開発した検査ということであり、中学校、高等学校の希望校には公共職業安定所を通して用紙が配布される。また、地域によっては安定所の職員等が学校に出向いて実施している場合もある。

利用状況をみると、2013 年度では厚生労働省から学校に配布された問題用紙は約 27 万部であり、このほか民間の事業者を通して一般の利用希望者に対しては年間約 3～4 万部が販売されている。

全国の全日制の高等学校に対して行った進路指導に関する調査において、進路指導で実施している検査を聞いたところ、職業レディネス・テストは普通科 15.7%（回答校 927 校中）、総合学科 21.4%（回答校 103 校中）、専門学科 38.0%（回答校 279 校中）で実施されていた（労働政策研究・研修機構,2017）。過去に大学入試センターが実施した全国の高等学校に対する調査では、職業レディネス・テストの利用割合は、回答があった 2615 校中の 15.8%であり（大学入試センター,1991）、高等学校においては 90 年代初めも今も約 2 割程度の学校で活用され続けていることがわかる。

このように職業レディネス・テストは、長期にわたり教育現場で使い続けられてきた検査であるが、現在は検査の初版が公表されてから 46 年が経過しており、その間に改訂は 2 回行われた。1 回目に公表された改訂版は 1989 年の「新版職業レディネス・テスト」であり、2 回目の改訂版は 2006 年に公表された「職業レディネス・テスト第 3 版」である（労働政策研究・研修機構,2006；労働政策研究・研修機構,2007）。

1 つの検査に対してこのような改訂が繰り返し行われている背景には、心理検査を公表し、一定の期間が経過した場合には、検査の信頼性、妥当性が損なわれていないかを確認することが開発者および発行者の責任であるという考え方があり、これはテストの実施と活用に関してまとめられたアメリカの APA(The American Psychological Association)のテスト・スタンダード¹において示されているほか、わが国では日本テスト学会による「テスト・スタンダード」（日本テスト学会,2007）においても記載されている（「1.12 テストの改訂 開発者は、尺度得点の解釈に影響を与える種々の社会的条件の変化を考慮し、必要に応じて質問項目の改訂や尺度の再標準化を行う。」）

すなわち、心理検査を作成する時には、検査が想定する対象者のデータを大量に集めて

¹ アメリカでは教育で用いられる検査や心理検査の作成や開発等に関するテスト・スタンダードが公表されている。心理検査の改訂や見直しについては、Standards for educational and psychological testing(American Educational Research Association, American Psychological Association & National Council on Measurement in Education,2014)の Standard 4.24 に述べられている。

標準化という手続きを行い、尺度の信頼性、妥当性の検証および結果を評価するための尺度の換算規準（以下、規準）を作成するが、作成時点から年月が経過すると社会的条件が変化し、それが対象者や検査項目に何らかの影響を及ぼしている可能性がある。そのため、検査の信頼性、妥当性、規準の適切さを保証するためには、定期的に見直しを行い、必要があれば改訂や再標準化を行うべきだとする考え方である。

特に、職業レディネス・テストが主な対象としている中学生、高校生は心身ともに大きく成長し、変化する段階にあることから、教育的な働きかけやその時の社会的環境が生徒たちの職業意識や自己概念の形成に与える影響を十分に考慮する必要がある。

そういった点から考えてみると、職業レディネス・テスト第3版が公表された2006年に、初等中等教育からのキャリア教育の具体的な進め方についての手引が公表され（文部科学省,2006）、小学校、中学校、高等学校における各段階でのキャリア教育の推進が提唱されたこと、その一環としてキャリア教育において、生徒の自己理解や職業理解の促進が目標の1つとして含められたことは、与えられる教育の内容という環境面での大きな変化としてみることができる。学校教育におけるキャリア教育の推進が中学生、高校生の職業選択に向けた意識を何らかの形で刺激するような効果をもつと仮定すれば、第3版の標準化の時とそれ以降では、中学生、高校生全体の職業レディネス・テストの得点に変化が生じるような影響がもたらされた可能性は考えられる。

このようなことから、労働政策研究・研修機構では、職業レディネス・テスト第3版の改訂に関する研究会を立ち上げ、検査全体の見直しや手引、ワークシートの改訂の必要性の検証および改訂内容についての検討を開始した²。

その改訂作業の一環として、本研究では、第3版が公表された2006年から10年以上が経過した現在、当時の中学生、高校生で標準化された職業レディネス・テストにおいて、現在でも尺度としての信頼性、妥当性が保たれているか、換算のための規準は適切かという点を検証し、検査項目の差し替えや再標準化等による規準の改訂の必要性を検討する。心理検査を使い続けるために必要な条件として考えれば、再標準化の必要性の検証は省いて一定の年月の経過とともに再標準化を実施することが理想的である。しかし、職業レディネス・テストの標準化には全国の中学校、高等学校を対象とする大規模な調査が不可欠であり、多くの時間と経費が必要となることから、まずは検査の再標準化の必要性を検討することが本研究の趣旨である。

² 職業レディネス・テストの改訂に関する研究は、外部委員、オブザーバーを含む委員会形式で実施されている。2018年現在の構成員は下記の通り（敬称略）。外部委員：本間啓二（日本体育大学）、安達智子（大阪教育大学）、小菅清香（学習院大学）、オブザーバー：日吉恵子（一般社団法人雇用問題研究会）。労働政策研究・研修機構内部委員（筆者除く）：松原亜矢子（統括研究員）、深町珠由（主任研究員）、鎌倉哲史（研究員）、秋山史子（アシスタントフェロー、学習院大学人文科学研究科）。なお、高校生データ分析の際の学科コード作成およびサンプリングにあたっては松本純平氏（労働政策研究・研修機構、元特任研究員）の協力をいただいた。

尺度の構造に関する信頼性と規準の妥当性に関しては、職業レディネス・テストの第3版が公表された後の2007年から2017年までの中学生と高校生のそれぞれの回答データを用いて、第3版作成時の尺度構成の信頼性が保たれているかを分析する。具体的な検討事項は次の通りである。

①検査の構造の信頼性の検討→職業レディネス・テストに含まれる3つの下位検査（A検査、B検査、C検査）はそれぞれ尺度としての構造、信頼性の点で第3版と大きく異なっていないか。

②粗点を標準得点³に換算するための規準の妥当性の検討→第3版で作成された中学生、高校生の規準を、近年の中学生、高校生に対してそれぞれ適用することができるか。2007年から2017年までの時系列として見た場合、各尺度の平均値の水準に尺度の見直しが必要となるような大きな変化の傾向はないか。

以上が職業レディネス・テストの尺度の信頼性および規準の妥当性を調べる上での本研究の作業課題であるが、上述の通り、本研究は職業レディネス・テストの改訂作業の一部として実施されるため、本稿の役割はデータに基づいて検証を行い、職業レディネス・テストの改訂の方向性を定めるための資料を示すことである。したがって、結果の解釈は、検査項目や内容の改変の必要性や新たな換算規準の作成の必要性という観点から行われる。また、本研究で扱う課題は、検査の構造や規準の妥当性に関する内容に限定されていることから、検査手引の改訂に関しては別の観点からの検討を行い、内容を検討していくことになる。

本研究における検証では、第3版公表後の2007年4月から2017年7月までの11年間分の中学生、高校生のデータを用いるが、職業レディネス・テストの場合、中学生と高校生は別々の換算規準を用いるため、分析も分けて行った。以下、「方法」は中学校、高等学校全体のデータについて記述するが、「結果」に関しては中学生データと高校生データに関する検討を分けて記述し、最後に両方をまとめて総合的な考察を行う。

なお、年月の経過による検査の信頼性、妥当性への影響を検討する場合、測定尺度としての検査の信頼性、妥当性に関する検証のほかに、検査項目や検査内容が受検者にとってわかりにくくなっていないか、古くなっている表現や記述はないかという点からの検証が必要である。職業レディネス・テストについては、これまでに検査項目やワークシート全般に関して内容がわかりにくい、あるいは、表現が古めかしい等の問い合わせや意見は検査の販売元や開発者に対して寄せられていない。そこで、第3版の検査項目・ワークシートの表現やわかりやすさに関しては、現時点での検討課題に含めていない。

³ 標準得点とは、標準化の規準集団と比較して個人の得点がどの水準に位置するのかを示すことができるように換算された得点である。

2. 方法

(1) 分析に用いたデータ

本研究では、2007年から2017年までの11年間に実施された職業レディネス・テストの回答結果のデータを分析の対象とした。このデータは、検査項目及び規準の見直しの研究目的のみに使用する条件で、職業レディネス・テストの販売および採点サービスを行っている事業所に協力を要請し、提供を受けたものである。このデータを選んだ理由は、職業レディネス・テストを実際に活用している中学校、高等学校のデータである、全国の様々な都道府県からのデータで構成されている、データ数が多い、第3版公表後の経年変化を見ることができるということであり、尺度の構造の信頼性や換算規準の妥当性を検証するための条件を満たしていると考えた。

提供を受けたデータは、実施年月、学校区分（中学校、高等学校の区分）、学校所在地の都道府県、所属学科（高等学校のみ）、回答者の学年、性別、各検査項目に対する回答という得点化された数値データのみであり、回答者の個人名、学校名は予め削除されていた⁴。分析にあたっては、次のような手続きで分析対象データ作成、変数の追加と再集計を行った。

①分析対象データ作成：学年は中学生、高校生ともに1年生から3年生に絞った⁵。全検査項目のうち、1つでも回答に欠損値を含むサンプル、職業レディネス・テストの各項目の得点化の範囲（A検査・C検査0～2点；B検査0～1点）以外の値が入力されているサンプルは分析から除外した。

②高校のデータについては、所属学科名が記入されていたが、文部科学省の学科名コードに準じて各サンプルに学科名に該当するコードを割り当てた。学科名が無記入のデータは分析対象から除外した。

③中学生、高校生の場合、学年ごとにデータを集計する必要があるため、実施年月によって年度のコードを割り当てた（該当年の4月～翌年3月までを同じ年度とする）。その結果、2007年1月から3月までに実施された2006年度に該当するサンプルは分析から除外した。

上記の作業後、分析の対象としたデータ数は中学生38,622名（1年生11,592名、2年生16,452名、3年生10,578名）であり、このうち男子は20,023名、女子は18,599名である（図表1）。他方、高校生のデータ数は、全体で347,362名（1年生229,969名、2年生103,756名、3年生13,637名）であり、男子は197,669名、女子は149,693名となった（図表2）。年度別、地域別の内訳の詳細は中学生、高校生それぞれの分析結果で示す。

⁴ この他、1年間に同学年に複数回検査を実施するなど、同一人物のデータが重複して含まれる可能性がある学校についてはデータに含まれていない。

⁵ 高校生では4年生のデータも若干含まれていたが、分析の対象からはずした。

図表1 中学生のデータ数と割合(%)

学年/性別	男子	女子	計
1年	5,886 (15.24)	5,706 (14.77)	11,592 (30.01)
2年	8,464 (21.91)	7,988 (20.68)	16,452 (42.60)
3年	5,673 (14.69)	4,905 (12.70)	10,578 (27.39)
計	20,023 (51.84)	18,599 (48.16)	38,622 (100.00)

図表2 高校生のデータ数と割合(%)

学年/性別	男子	女子	計
1年	134,399 (38.69)	95,570 (27.51)	229,969 (66.20)
2年	56,349 (16.22)	47,407 (13.65)	103,756 (29.87)
3年	6,921 (1.99)	6,716 (1.93)	13,637 (3.93)
計	197,669 (56.91)	149,693 (43.09)	347,362 (100.00)

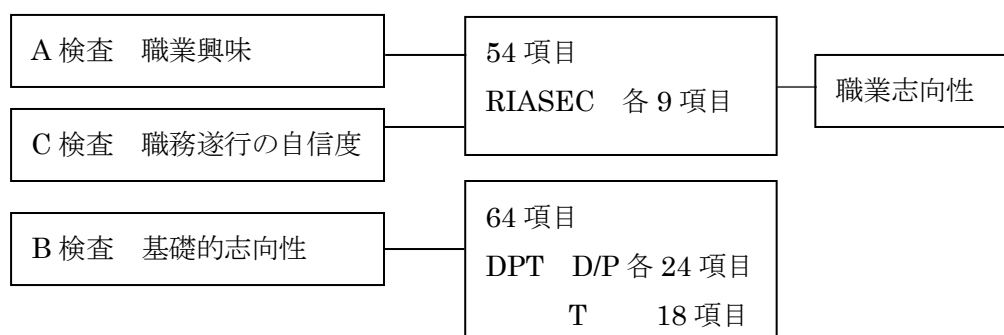
(2) 職業レディネス・テストの尺度構成と採点方法、得点の換算について

後述の分析では、職業レディネス・テストの得点が問題となるため、検査の尺度構成と採点方法、得点の換算について述べる。

①検査の構造と得点化

職業レディネス・テストはA検査（職業興味）、B検査（基礎的志向性）、C検査（職務遂行の自信度：以下、自信度）から構成される（図表3）。A検査（職業興味）とC検査（自信度）は職務内容の記述に関する同一の54項目で構成されており、A検査（職業興味）では、各項目に対して興味の有無を「やりたい」、「どちらともいえない」、「やりたくない」の3段階で回答し、C検査（自信度）では自信の有無を「自信がある」、「どちらともいえない」、「自信がない」の3段階で回答する。

図表3 職業レディネス・テストの構成



採点の時は「やりたい」、「自信がある」を2点、「どちらともいえない」を1点、「やりたくない」、「自信がない」を0点として計算する。54項目はホランド (Holland, J.L., 1985) によって理論化されている6領域（現実的職業領域：R領域、研究的職業領域：I領域、芸術的職業領域：A領域、社会的職業領域：S領域、企業的職業領域：E領域、慣習的職

業領域：C 領域）に対応するように構成されており、1 領域に関して9項目が含まれる。そこで、各領域の最高点は18点（2点×9項目）、最低点は0点となる。RIASECの各領域の特徴を図表4に示す⁶。

図表4 ホランドによる6つの職業領域の名称と特徴

領域の名称			特徴
現実的職業領域	Realistic	R 領域	機械や物を対象とする具体的で実際的な仕事や活動の領域
研究的職業領域	Investigative	I 領域	研究や調査のような研究的、探索的な仕事や活動の領域
芸術的職業領域	Artistic	A 領域	音楽、美術、文学等を対象とするような仕事や活動の領域
社会的職業領域	Social	S 領域	人と接したり、人に奉仕したる仕事や活動の領域
企業的職業領域	Enterprising	E 領域	企画・立案したり、組織の運営や経営等の仕事や活動の領域
慣習的職業領域	Conventional	C 領域	定まった方式や規則、習慣を重視したり、それに従って行うような仕事や活動の領域

出典：職業レディネス・テスト 第3版手引(2006)より

B 検査（基礎的志向性）は、特定の職務とは関係のない、日常生活での行動や感じ方についての記述、64項目で構成される。各項目については「あてはまる」と「あてはまらない」のどちらかで回答し、「あてはまる」の場合には1点、「あてはまらない」の場合には0点で採点する。B 検査（基礎的志向性）は、対情報関係志向「Data Orientation：D 志向」、対人関係志向「People Orientation：P 志向」、対物関係志向「Thing Orientation：T 志向」の3つの基礎的志向性に関連する項目で構成されている。対情報志向（D）と対人志向（P）には各24項目、対物志向（T）には18項目がある。したがってD志向とP志向は最高点が24点、最低点が0点、T志向は最高点が18点、最低点が0点となる。DPTの特徴を図表5に示す。

図表5 3つの基礎的志向性の名称と特徴

志向性の名称			特徴
対情報関係志向	Data Orientation	D志向	各種の知識、情報、概念などを取り扱うことに対して、個人の諸特性が方向づけられている。
対人関係志向	People Orientation	P志向	人に直接かかわっていくような活動に対して、個人の諸特性が方向づけられている。
対物関係志向	Thing Orientation	T志向	直接、機械や道具、装置などのいわゆる物を取り扱うことに対して、個人の諸特性が方向づけられている。

出典：職業レディネス・テスト 第3版手引(2006)より

②粗点の換算について

A 検査（職業興味）、C 検査（自信度）では、6 領域に関してそれぞれ粗点を算出した後

⁶ A 検査、C 検査の職業の各領域の表記は「現実的職業領域」等が正式であるが、以下「現実的領域あるいはR 領域」等の表記を用いる。B 検査についても「対情報志向あるいはD 志向」等の表記を用いる。

に、中学生は中学生の換算表、高校生は高校生の換算表により標準得点が算出される。各領域の粗点の合計点 0～18 点に対して 1 点刻みで換算が行われる。標準得点の算出によって、中学生は中学生の規準集団の中での、高校生は高校生の規準集団の中での各領域の興味や自信度の水準が示される。職業レディネス・テストでは 6 領域に関する換算得点を用いて、各領域の水準を示すプロフィールを描き、興味がある領域、興味がない領域や自信がある領域、自信がない領域について視覚的に理解できるようなワークが「結果の見方・生かし方」というワークシートに用意されている。

B 検査（基礎的志向性）にも中学生用と高校生用の換算表があり、各志向性の粗点の合計点に関して 1 点刻みで対応する標準得点が示されている。受検者あるいは採点者は換算表を用いて各志向性の粗点を標準得点に変換し、ワークシートに DPT の各水準のプロフィールを作成する。なお、3 つの志向性にはそれぞれ下位尺度があり、対情報志向 (D) と対人志向 (P) は各 3 つ、対物志向 (T) は 2 つの尺度で構成されているが、下位尺度については項目数が少ないため特に換算を行わず、粗点の合計点だけを算出してそれぞれの傾向を確認するようなワークが用意されている。

3. 中学生データに関する検討結果

(1) データの特徴

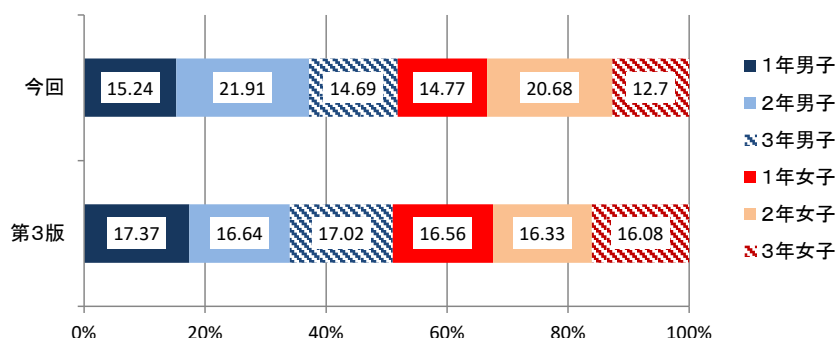
①第 3 版と今回のデータの男女別、学年別の内訳

中学生の男女別学年別構成人数の内訳は図表 1（前掲）の通り、男子は 51.84%、女子は 48.16%となった。男子の割合がやや多いもののデータの性別構成としてそれほど大きな偏りがあるとはいえない。職業レディネス・テスト第 3 版作成時の標準化データの中学生男女のデータ数と割合は男子 5,596 名 (51.03%)、女子 5,370 名 (48.97%)、計 10,966 名であり、今回のデータの男女比は第 3 版の標準化データとほぼ同じ割合となっている。

学年については、今回のデータは 1 年生 11,592 名 (30.01%)、2 年生 16,452 名 (42.60%)、3 年生 10,578 名 (27.39%) で、2 年生が約 4 割、1 年生、3 年生がそれぞれ約 3 割という構成である。第 3 版作成時のデータでは、1 年生 3,721 名 (33.93%)、2 年生 3,616 名 (32.98%)、3 年生 3,629 名 (33.09%)、計 10,966 名であり、各学年 3 割程度であった。今回のデータの方が 2 年生の割合が少し高めとなっている。

男女別学年別にみた各グループの人数が全体に占める割合を今回のデータと第 3 作成時のデータで比較したものが図表 6 である。第 3 版作成時のデータでは、各学年男女別のそれぞれのグループの割合が 16～17%で揃っているが、今回のデータでは男女ともに 2 年生の実施が多いため、2 年生の男女のグループの割合が 2 割程度で他よりもやや多くなっている。ただ、全体の人数が多いことと、換算規準は男女別に算出するが、学年別の分析は行わないため、今回のデータに関するサンプリング等による人数の調整は行わなかった。

図表6 今回データと第3版の規準集団における男女別学年別の構成割合(%)



②各年度の学年、男女別人数

次に、データの2007年度から2017年度の年度別に学年と男女でデータを集計した結果を図表7に示す。どの年度もおよそ3,000~4,000件で推移しているが、2017年度は7月までのデータであるため1,800件程度であり、他の年度よりも数が少なかった。年度別に男女の構成比をみると、どの年度も男子の方が女子よりも若干割合が高めだが、2008年と2012年では女子の数が男子とほぼ同程度である。

図表7 中学生の各年度の学年別男女別データ数

学年/男女別	1年			2年			3年			合計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
2007 件数	488	441	929	767	742	1509	406	249	655	1661	1432	3093
2007 %	(52.53)	(47.47)	(100)	(50.83)	(49.17)	(100)	(61.98)	(38.02)	(100)	(53.70)	(46.30)	(100)
2008 件数	513	485	998	860	830	1690	507	561	1068	1880	1876	3756
2008 %	(51.40)	(48.60)	(100)	(50.89)	(49.11)	(100)	(47.47)	(52.53)	(100)	(50.05)	(49.95)	(100)
2009 件数	420	426	846	527	512	1039	630	467	1097	1577	1405	2982
2009 %	(49.65)	(50.35)	(100)	(50.72)	(49.28)	(100)	(57.43)	(42.57)	(100)	(52.88)	(47.12)	(100)
2010 件数	477	444	921	1078	907	1985	402	301	703	1957	1652	3609
2010 %	(51.79)	(48.21)	(100)	(54.31)	(45.69)	(100)	(57.18)	(42.82)	(100)	(54.23)	(45.77)	(100)
2011 件数	431	477	908	979	930	1909	593	490	1083	2003	1897	3900
2011 %	(47.47)	(52.53)	(100)	(51.28)	(48.72)	(100)	(54.76)	(45.24)	(100)	(51.36)	(48.64)	(100)
2012 件数	534	545	1079	776	740	1516	490	514	1004	1800	1799	3599
2012 %	(49.49)	(50.51)	(100)	(51.19)	(48.81)	(100)	(48.80)	(51.20)	(100)	(50.01)	(49.99)	(100)
2013 件数	825	796	1621	489	492	981	637	557	1194	1951	1845	3796
2013 %	(50.89)	(49.11)	(100)	(49.85)	(50.15)	(100)	(53.35)	(46.65)	(100)	(51.40)	(48.60)	(100)
2014 件数	612	557	1169	666	634	1300	530	536	1066	1808	1727	3535
2014 %	(52.35)	(47.65)	(100)	(51.23)	(48.77)	(100)	(49.72)	(50.28)	(100)	(51.15)	(48.85)	(100)
2015 件数	639	662	1301	701	612	1313	588	530	1118	1928	1804	3732
2015 %	(49.12)	(50.88)	(100)	(53.39)	(46.61)	(100)	(52.59)	(47.41)	(100)	(51.66)	(48.34)	(100)
2016 件数	850	787	1637	862	882	1744	756	599	1355	2468	2268	4736
2016 %	(51.92)	(48.08)	(100)	(49.43)	(50.57)	(100)	(55.79)	(44.21)	(100)	(52.11)	(47.89)	(100)
2017 件数	97	86	183	759	707	1466	134	101	235	990	894	1884
2017 %	(53.01)	(46.99)	(100)	(51.77)	(48.23)	(100)	(57.02)	(42.98)	(100)	(52.55)	(47.45)	(100)
年度計 件数	5886	5706	11592	8464	7988	16452	5673	4905	10578	20023	18599	38622
年度計 %	(50.78)	(49.22)	(100)	(51.45)	(48.55)	(100)	(53.63)	(46.37)	(100)	(51.84)	(48.16)	(100)

学年別の構成比をみると若干の例外はあるものの、2011年度までは2年生の数が多く、3年生が次で1年生の数が少ないという年が多いが、2012年度以降は1年生の数が多くなっている。検査の実施件数の年度推移の検討は本稿の主目的ではないが、過去11年間のうち、後半の5年間から中学校の低学年からの検査の実施が多くなっていることは、学校における早期からのキャリア形成支援の実践の影響も考えられ、検査の使い方や対象となる層の変化の傾向は手引作成の際に考慮する必要がある。

③地域ブロック別学年毎のデータの集計

第3版の標準化の際には全国を6ブロックに分けて各地域ブロックの中学校 38校からデータを収集した。地域ブロック別の学校数は、北海道・東北6校、関東10校、東海・中部・北陸8校、近畿6校、中国・四国4校、九州・沖縄4校であった。

今回のデータに関する各年度の地域ブロック別のデータ数の内訳を図表8に示す。関東では東京のデータ数が多いので、東京のみを別にした。年度計の割合をみると東京と関東のデータの合計は約46%となり、全体の半数近くを占める。次が東海・中部・北陸で23.35%、その次が中国・四国で11.72%であった⁷。

図表8 中学生の地域ブロック別にみた各年度、学年別のデータ数の内訳(件)

		2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	計	%
北海道・東北	1年	107	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	107	
	2年	85	101	87	0	119	177	0	6	2	0	8	585	
	3年	32	0	0	17	0	0	0	0	0	0	4	53	
	計	224	101	87	17	119	177	0	6	2	0	12	745	(1.93)
関東(東京除く)	1年	139	0	0	0	0	0	112	88	0	196	0	535	
	2年	186	88	123	274	266	111	280	556	481	257	0	2622	
	3年	0	0	67	0	0	73	235	0	0	6	0	381	
	計	325	88	190	274	266	184	627	644	481	459	0	3538	(9.16)
東京	1年	0	346	225	193	494	707	898	711	864	928	137	5503	
	2年	699	292	153	582	617	320	317	411	264	358	865	4878	
	3年	343	86	284	147	454	125	523	740	441	574	38	3755	
	計	1042	724	662	922	1565	1152	1738	1862	1569	1860	1040	14136	(36.60)
東海・中部・北陸	1年	0	0	0	78	0	0	146	124	125	377	46	896	
	2年	457	936	362	553	609	431	145	207	296	847	492	5335	
	3年	133	641	214	216	346	118	5	288	268	462	95	2786	
	計	590	1577	576	847	955	549	296	619	689	1686	633	9017	(23.35)
近畿	1年	83	101	0	0	1	0	0	0	0	0	0	185	
	2年	0	55	0	431	163	217	14	0	15	18	0	913	
	3年	0	187	389	198	185	415	273	0	409	280	98	2434	
	計	83	343	389	629	349	632	287	0	424	298	98	3532	(9.15)
中国・四国	1年	395	436	452	435	413	372	465	246	257	120	0	3591	
	2年	0	0	0	0	0	127	118	120	114	253	101	833	
	3年	0	69	0	0	0	0	0	0	0	33	0	102	
	計	395	505	452	435	413	499	583	366	371	406	101	4526	(11.72)
九州・沖縄	1年	205	115	169	215	0	0	0	0	55	16	0	775	
	2年	82	218	314	145	135	133	107	0	141	11	0	1286	
	3年	147	85	143	125	98	273	158	38	0	0	0	1067	
	計	434	418	626	485	233	406	265	38	196	27	0	3128	(8.10)
地域合計	1年	929	998	846	921	908	1079	1621	1169	1301	1637	183	11592	(30.01)
	2年	1509	1690	1039	1985	1909	1516	981	1300	1313	1744	1466	16452	(42.60)
	3年	655	1068	1097	703	1083	1004	1194	1066	1118	1355	235	10578	(27.39)
	計	3093	3756	2982	3609	3900	3599	3796	3535	3732	4736	1884	38622	(100.00)

検査の標準化のためにデータを集める際には、全国の中学校の学校数の割合に応じて、各地域ブロックの学校数を決めているが、今回のデータは計画的に集められたものではないので、地域という点からみると偏りが生じている。ただ、尺度の信頼性、妥当性は回答の一貫性を問題にするので地域ブロックによるデータ構成比の違いは特に影響しないと考える。地域ブロックのデータの構成比の影響があるとすれば、職業レディネス・テストの尺度における職業興味、職務遂行の自信度、基礎的志向性の平均値の高さへの影響である

⁷ 図表8は中学生のデータ数であり、職業レディネス・テスト第3版手引に掲載されているのは地域ブロック別の学校数であるので、単純には比較できない。

が、この点については各尺度の得点に関する結果を検討する際に必要に応じて検討する。

(2) 各尺度の信頼性・妥当性の検証

①A 検査（職業興味）と C 検査（自信度）の尺度としての信頼性・妥当性

職業レディネス・テストでは図表3で示した通り、職業興味と職務遂行の自信度を同じ54項目で測定するが、各項目は6領域（RIASEC）のいずれかを測定する項目となっている。そこで、職業興味、自信度の回答それぞれに関して、各項目が本来想定されているRIASECの各領域に正確に関連づけられるかを検討した。この分析に関しては、2007年度から2017年度の全データ（38,622件）を用いた。

職業レディネス・テストの通常の採点方法と同様に各項目に対する個人の回答を得点化し（やりたい、自信がある→2点、どちらともいえない→1点、やりたくない、自信がない→0点）、A 検査（職業興味）と C 検査（自信度）それぞれについて、54項目全体での因子分析を行った。尺度全体の構造としては6因子の抽出が期待されるので、主因子法の後、6因子を指定して Promax 回転を行った。

【A 検査（職業興味）についての因子分析の結果】

初めに、A 検査について得られた結果を図表9に示す。図表9では各項目の職務内容の記述の前に、検査で測定されるRIASECの領域と項目番号が記載されている。

各因子について、高い負荷量を示した項目を見て、各因子がどの領域に対応しているのかをみていくと、第1因子（F1）には研究的領域（I 領域）、第2因子（F2）には現実的領域（R）を測定する項目がそれぞれ9項目ずつ集まった。第3因子（F3）には因子負荷量が高いものとして10項目が抽出された。このうち9項目は、第3版（現行版）の検査において芸術的領域（A）を測定する項目であり、残りは企業的領域（E）を測定する1項目（No.17）であった。このことから第3因子は芸術的領域（A）への職業興味を示す因子として解釈されるが、その中に企業的領域（E）に関連する項目が1項目混ざっていることになる。ただし、このNo.17「客を集めるため、広告や催し物などを企画する」は、第6因子として抽出されている企業的領域（E）に関しても比較的高い負荷量を示している。第4因子（F4）には社会的領域（S）、第5因子（F5）には慣習的領域（C）に対応する項目がそれぞれ9項目ずつ集まった。最後の第6因子（F6）には、企業的領域（E）の項目のうち上述のNo.17を除く8項目が高い負荷量を示した。

図表9 中学生の「職業興味」を測定する54項目の因子分析結果

(Promax 回転後の因子負荷量)

項目内容	因子負荷量					
	F1	F2	F3	F4	F5	F6
I_32 病原体を発見するための実験や研究をする	.786	-.096	-.058	.095	.007	.041
I_50 大学や研究所で、科学の研究をする	.757	-.033	.003	-.088	.068	.053
I_26 新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	.686	-.016	.022	-.118	.071	-.098
I_38 新しい薬を開発する	.678	-.092	-.036	.101	.017	.127
I_20 海水の成分や海流について調査研究する	.633	.152	.019	.030	.013	-.057
I_8 環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	.545	.106	.023	.114	.076	-.098
I_14 農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	.500	.186	.047	.095	.017	-.059
I_44 博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	.493	.178	.157	.019	-.026	-.037
I_2 古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	.491	.327	.110	-.067	-.117	-.048
R_25 工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	-.067	.778	-.036	.012	-.005	.002
R_31 トラックを運転して貨物を運ぶ	-.126	.735	-.040	.054	.055	-.007
R_37 自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	.066	.688	-.044	-.072	.065	.003
R_13 木材を加工し、組み立てて、家を建てる	.015	.677	.052	-.034	-.027	.017
R_49 船に乗って、魚や貝などの漁をする	.092	.612	-.033	.056	-.120	.056
R_43 飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	.112	.541	-.043	.089	.066	.035
R_1 部品を組み立てて機械を作る	.151	.525	.072	-.230	.160	-.045
R_7 火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	.100	.510	.053	.052	-.021	.055
R_19 火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	.111	.496	-.084	.245	-.138	.095
A_51 雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	.004	.047	.755	.031	-.007	-.125
A_27 マンガをかいて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	.104	.105	.672	-.112	-.071	-.040
A_9 小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	.162	-.135	.606	-.046	-.013	.026
A_33 インターネットのホームページのデザインをする	-.049	.013	.588	-.031	.266	-.005
A_21 テレビドラマや映画のシナリオを書く	.098	-.074	.554	-.031	-.076	.259
A_45 洋服やアクセサリのデザインをする	-.150	-.116	.548	.258	-.052	.026
A_3 家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	-.077	-.013	.537	.162	.017	.005
A_15 人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	.012	.094	.530	.150	.018	-.005
A_39 曲を作ったり、編曲したりする	.014	-.035	.514	.053	-.077	.164
E_17 客を集めるため、広告や催し物などを企画する	-.016	-.003	.291	.164	.131	.246
S_28 患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	.209	-.078	-.080	.770	.000	-.115
S_34 家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	.079	.089	.029	.710	-.028	-.177
S_40 病院で、患者の治療や病気の予防の仕事を	.361	-.117	-.140	.650	-.005	-.013
S_4 保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	-.137	-.018	.125	.587	-.077	-.078
S_46 悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	.052	.026	.145	.584	-.016	-.017
S_52 飛行機の中で、乗客にサービスをする	-.093	.052	.089	.548	.064	.125
S_22 ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	-.170	.026	.057	.510	.183	.134
S_16 ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話を	-.067	.058	.043	.485	.071	.140
S_10 客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	-.012	.125	.072	.415	.022	.012
C_36 ワードプロセッサやパソコンを使って、書類などを清書する	.027	-.046	.178	-.060	.727	-.104
C_18 文字や数字を、書類に正確に記入する	.027	-.094	-.018	.068	.726	-.092
C_6 文字や数字を、コンピュータに入力する	.021	-.014	.120	-.137	.694	-.106
C_12 帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	-.007	.006	-.112	.059	.680	.008
C_42 コンピュータを使って、複雑な計算をする	.198	.020	-.032	-.169	.615	-.006
C_54 従業員の毎月の給料を計算する	-.031	.075	-.118	.061	.596	.132
C_48 会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	-.050	.038	-.006	.178	.515	.098
C_30 依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	.106	-.047	.006	.171	.460	.058
C_24 銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	-.022	.104	-.100	.152	.442	.163
E_41 社長として、会社の経営の仕事にあたる	.070	.044	-.105	-.130	.012	.730
E_23 新しい組織を作ってリーダーになる	.106	.052	.002	-.110	-.069	.628
E_47 店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	-.031	.106	.019	-.002	.081	.627
E_5 自分の店を経営する	-.065	.045	.095	-.010	-.060	.531
E_11 テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	.020	-.062	.259	.005	-.025	.497
E_35 ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	.000	-.053	.196	.106	-.070	.480
E_53 流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	-.057	.011	.199	.077	.111	.455
E_29 世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	.174	.012	.216	.060	.099	.265

因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1	1					
F2	.425	1				
F3	.098	.039	1			
F4	.116	.052	.363	1		
F5	.362	.283	.219	.246	1	
F6	.242	.325	.437	.404	.386	1

以上、因子分析の結果、No.17を除く 53 項目は本来想定されている職業興味の領域に対応づけられることが今回のデータによって確認された。したがって、第 3 版（現行版）の A 検査（職業興味）の尺度としての構造は大きく変化していないとみることができる。ただ、項目 No.17 については企業的領域（E）への負荷量も高かったが芸術的領域（A）への負荷量も高かったため、No.17 を企業的領域（E）の測定尺度としてみなしてよいか問題となる。この点については、C 検査の結果も踏まえて再度検討する。

【C 検査（自信度）についての因子分析の結果】

C 検査について因子分析を行った結果を図表 10 に示す。第 1 因子（F1）については、職業興味と同じく研究的領域（I）を測定する 9 項目の負荷量が高く、第 1 因子は研究的領域への自信度を示す因子と解釈した。第 2 因子（F2）には現実的領域（R）を測定する 9 項目、第 3 因子（F3）には慣習的領域（C）の 9 項目がまとまった。さらに、第 4 因子（F4）では芸術的領域（A）を測定する 9 項目の負荷量が高かった。職務遂行の自信度に関してみると、職業興味に基づく結果とは異なり、No.17 の企業的領域（E）の項目が芸術的領域（A）の因子にまとまることはなかった。第 5 因子（F5）では社会的領域（S）、第 6 因子（F6）では企業的領域（E）の各 9 項目の負荷量が高かった。

以上により、職務遂行の自信度に関しては第 3 版作成時の尺度構成がそのまま正確に保たれていることが今回のデータによっても確認された。

図表 10 中学生の「職務遂行の自信度」を測定する 54 項目の因子分析結果
(Promax 回転後の因子負荷量)

項目内容	因子負荷量					
	F1	F2	F3	F4	F5	F6
I.32 病原体を発見するための実験や研究をする	.800	.012	-.070	-.046	.063	.015
I.50 大学や研究所で、科学の研究をする	.747	.089	-.009	.002	-.078	.021
I.20 海水の成分や海流について調査研究する	.725	.012	.081	.001	.008	-.041
I.38 新しい薬を開発する	.694	-.002	-.059	-.021	.054	.089
I.26 新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	.680	.084	-.021	.014	-.101	.095
I. 8 環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	.655	.075	.011	-.030	.069	-.047
I.14 農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	.621	.001	.095	.014	.075	-.047
I.44 博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	.564	-.032	.087	.137	.020	-.030
I. 2 古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	.542	-.102	.253	.091	-.060	-.044
R.25 工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	-.071	.799	.011	-.026	.004	.008
R.31 トラックを運転して貨物を運ぶ	-.108	.742	.071	-.041	.042	.020
R.37 自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	.066	.730	.049	-.005	-.065	-.022
R.13 木材を加工し、組み立てて、家を建てる	.008	.718	-.032	.088	-.048	-.010
R.49 船に乗って、魚や貝などの漁をする	.095	.598	-.117	-.030	.069	.041
R. 1 部品を組み立てて機械を作る	.095	.582	.147	.103	-.196	-.071
R.43 飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	.111	.577	.051	-.028	.092	.020
R. 7 火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	.105	.511	-.021	.007	.054	.076
R.19 火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	.078	.497	-.168	-.081	.197	.141
C.18 文字や数字を、書類に正確に記入する	.024	-.063	.766	-.007	.017	-.073
C. 6 文字や数字を、コンピュータに入力する	-.024	-.010	.745	.100	-.116	-.105
C.36 ワードプロやパソコンを使って、書類などを清書する	.015	-.032	.740	.166	-.066	-.090
C.12 帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	.020	-.009	.730	-.118	.020	.017
C.42 コンピュータを使って、複雑な計算をする	.130	.060	.650	-.013	-.149	.008
C.54 従業員の毎月の給料を計算する	-.003	.044	.649	-.121	.055	.120
C.24 銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	-.015	.091	.517	-.093	.166	.100
C.48 会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	-.030	-.003	.514	-.004	.206	.102
C.30 依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	.097	-.065	.488	-.004	.174	.078
A.51 雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	.011	.053	.003	.770	.017	-.144
A.27 マンガをかいて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	.094	.084	-.068	.665	-.103	-.021
A.33 インターネットのホームページのデザインをする	-.065	.018	.240	.631	-.001	-.029
A.45 洋服やアクセサリーのデザインをする	-.113	-.048	-.055	.628	.208	-.012
A. 3 家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	-.080	.038	-.013	.610	.107	.000
A. 9 小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	.140	-.132	-.022	.576	-.055	.091
A.15 人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	.024	.069	.041	.535	.147	.001
A.21 テレビドラマや映画のシナリオを書く	.095	-.082	-.075	.521	-.051	.296
A.39 曲を作ったり、編曲したりする	.028	-.016	-.083	.502	.041	.162
S.28 患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	.173	-.038	.014	-.059	.767	-.138
S.34 家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	.060	.038	-.055	.014	.737	-.145
S.40 病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	.327	-.065	-.001	-.093	.621	-.035
S.46 悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	.037	-.020	-.045	.118	.595	.006
S. 4 保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	-.123	-.025	-.099	.086	.591	-.041
S.52 飛行機の中で、乗客にサービスをする	-.098	.073	.082	.070	.587	.096
S.22 ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	-.144	.018	.161	.031	.574	.114
S.16 ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	-.061	.009	.076	.019	.564	.132
S.10 客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	-.015	.113	-.001	.068	.458	.014
E.41 社長として、会社の経営の仕事にあたる	.051	.062	.009	-.109	-.099	.752
E.23 新しい組織を作ってリーダーになる	.059	.079	-.059	-.029	-.070	.661
E.47 店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	-.029	.080	.082	.008	.000	.652
E. 5 自分の店を経営する	-.062	.045	-.037	.013	-.038	.643
E.11 テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	.011	-.067	-.029	.216	-.013	.585
E.35 ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	-.010	-.044	-.046	.162	.092	.514
E.53 流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	-.052	.013	.096	.185	.063	.481
E.17 客を集めるため、広告や催し物などを企画する	-.007	-.028	.100	.253	.161	.337
E.29 世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	.169	-.019	.126	.183	.039	.315

因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1	1					
F2	.435	1				
F3	.401	.283	1			
F4	.121	.042	.174	1		
F5	.173	.093	.262	.366	1	
F6	.298	.340	.387	.444	.439	1

【A 検査（職業興味）、C 検査（自信度）の信頼性係数の算出】

因子分析では尺度を構成する 54 項目を用いて構造をみた。その際には、第 3 版の RIASEC の各領域とそれぞれに対応する 9 項目との関係は考慮していない。結果として、今回のデータを用いた分析では No.17 の企業的領域（E）に対応する項目が、職業興味に関して芸術的領域（A）にも高い負荷量を示した。ただし、職務遂行の自信度に関しては、No.17 も本来の企業的領域（E）の因子に含まれることが確認されたほか、各項目は本来想定されている領域に対応づけられることが確認でき、6 つの職業領域への興味や自信を測定する項目として尺度としての信頼性も高いことが示された。

そこで、第 3 版で用いられている RIASEC を測定する 9 項目が、当該領域を測定する上でどの程度の信頼性を持っているかを検討するため、今回のデータを用いてクロンバックの α 係数を算出した。結果を図表 11 に示す。なお、図表 11 には第 3 版作成時の標準化データで算出した各尺度の信頼性係数（中学生だけでなく、高校生のデータも含めて算出した値）を参考として示している。これは第 3 版で用いられている本来の 9 項目で 6 つの各領域を測定した場合にどの程度の信頼性が得られるかを示すものであるが、値をみると、A 検査の企業的領域（E）は相対的には .83 と他よりも低めであるものの、第 3 版作成時においてもこの領域の信頼性係数は .83 で同じ値である。また企業的領域（E）以外の領域の信頼性係数をみても高い値が得られており、第 3 版の尺度構成で職業興味と職務遂行の自信度を測定しても、RIASEC の各領域の特性は正確に測定できることが確認できた。

図表 11 第 3 版の尺度構成に基づいた A 検査、C 検査の尺度の信頼性係数（中学生）

下位検査/領域・志向性	クロンバックの α 係数	第 3 版作成時の α 係数 (参考)	下位検査/領域・志向性	クロンバックの α 係数	第 3 版作成時の α 係数 (参考)
A 検査	R 領域	.87	R 領域	.88	.90
	I 領域	.88	I 領域	.90	.91
	A 領域	.85	A 領域	.86	.85
	S 領域	.84	S 領域	.85	.85
	E 領域	.83	E 領域	.85	.86
	C 領域	.86	C 領域	.88	.89

※第 3 版作成時のクロンバックの α 係数は中学、高校込みの 28,070 名で算出している。

※上記は 2007-2017 年度のデータ(n=38,622)で算出したが、2013-2016 年度の直近のデータ(n=15,799)で算出した場合でも α 係数はすべて上記と同値となった。

②B 検査（基礎的志向性）の尺度としての信頼性・妥当性

職業レディネス・テストの B 検査は、職務内容に関する興味や自信を尋ねる A 検査や C 検査とは異なり、日常生活での行動や態度についての回答を求める項目である。64 項目が用意されており、各項目は対情報志向（D）、対人志向（P）、対物志向（T）の 3 つのいずれかに対応している。そこで、基礎的志向性を測定する 64 項目について、各項目が本来

想定されている DPT の各志向性に正確に関連づけられるかを検討した。この分析に関しては、2007 年から 2017 年の全データ (38,622 件) を用いた。B 検査については、「あてはまる」を 1 点、「あてはまらない」を 0 点として採点し、64 項目で因子分析を行った⁸。尺度全体の構造としては DPT の 3 因子の抽出が期待されるので、主因子法の後、3 因子を指定して Promax 回転を行った。

【B 検査 (基礎的志向性) についての因子分析の結果】

B 検査の因子分析の結果を図表 12 に示す。図表 12 の項目内容の欄には、先頭の列に各項目の DPT の志向性と項目番号が記載されている。

第 1 因子 (F1) に負荷量の高かった項目は、対人志向 (P) に関する 24 項目であった。第 2 因子 (F2) には対情報志向 (D) に関する 24 項目、第 3 因子 (F3) には対物志向 (T) に関する 16 項目の負荷量が高かった。この結果をみると、職業レディネス・テスト第 3 版における B 検査の各項目と 3 つの志向性の対応関係はすべて一致し、今回のデータにおいても B 検査を構成する各項目が DPT の志向性を正確に測定していることが確認できた。

【B 検査の信頼性係数の算出】

B 検査で用いられている DPT の 24 項目ないし 16 項目がそれぞれ含まれる 3 つの志向性の尺度としての信頼性を検証した。対情報志向 (D)、対人志向 (P) の各 24 項目、対物志向 (T) の 16 項目ごとに信頼性係数 (クロンバックの α 係数) を算出した結果を図表 13 に示す。図表 13 には第 3 版作成時の標準化データによって算出した各志向性の信頼性係数 (中学生だけでなく、高校生のデータも含めて算出した値) を参考のために記載している。

値をみると、対情報志向 (D) と対物志向 (T) は第 3 版の時の α 係数と同値、対人志向 (P) も第 3 版作成時が .85、今回が .86 でほぼ等しかった。信頼性係数 (クロンバックの α 係数) としての値の水準も高く、各志向性を測るための項目としてこれらが現在も第 3 版と同程度の高い信頼性を維持していることが確認できた。

⁸ B 検査は 2 件法であるため、因子分析の適用は必ずしも適切ではない。ただ、第 3 版の作成時に因子分析とクラスター分析で分析を行い、同じ結果が得られていることから、A 検査、C 検査と同様に、今回も因子分析により尺度の構造を検討した。

図表 12 中学生の B 検査 (64 項目) の因子分析結果 (Promax 回転後の因子負荷量)

項目内容	因子負荷量		
	F1	F2	F3
P.61 人とすぐに仲良くなれる	.619	-.012	-.042
P.50 人からよく元気な人だと思われる	.605	-.069	-.037
P.26 新しい友だちをつくるのは得意だ	.593	.015	-.072
P.42 自分から人に話しかけることが多い	.585	-.003	-.078
P.18 場の雰囲気を盛り上げるのが得意だ	.516	.058	-.109
P. 5 グループで行動するのが好きだ	.513	-.137	.044
P.21 グループで作業するような授業は楽しい	.510	-.092	.104
P.37 人と話をするのは楽しい	.509	-.020	.049
P.45 友だちとおしゃべりやメールのやりとりが好きだ	.486	-.031	-.023
P.64 いろいろな人と関わられるような仕事をしたい	.476	.153	.017
P.13 友だちは多いほど楽しい	.474	-.161	.058
P.16 人が喜んでいるのを見ると自分もうれしくなる	.431	.049	.136
P. 2 話し合いの場ではよく発言する方だ	.410	.204	-.144
P.40 人に感謝されとうれしい	.403	.042	.135
P.34 人より目立つことが好きだ	.395	.143	-.131
P.10 人前で発言するのが得意だ	.393	.211	-.169
P.29 たくさんの人数で遊べるゲームが好きだ	.389	-.139	.152
P.53 休みの日に家で一人で過ごすのはつまらない	.387	-.170	.043
P. 8 友だちや家族の役に立つとうれしい	.386	.053	.152
P.32 困っている人を見るとつい声をかけたくなる	.383	.123	.107
P.56 他の人の世話をするのが好きだ	.337	.103	.096
P.58 劇をやるなら舞台上であって演技をしたい	.316	.123	-.047
P.48 世の中の役に立つことをしたい	.271	.238	.173
P.24 立場の弱い人には親切にすべきだと思う	.219	.065	.170
D.49 何かを説明するときにはわかりやすく情報を整理する	.034	.509	-.022
D.55 必要な情報はいつもきちんと整理しておきたい	.008	.503	.046
D. 9 情報を集めるのが好きだ	.042	.498	-.051
D. 1 短い間にたくさんの情報を集めることが得意だ	.042	.495	-.107
D.28 世の中で起きている事件や出来事に関心がある	.065	.464	.054
D.44 わからないことがあるとインターネットや本で調べる	-.050	.446	.029
D.36 税金や制度など社会の仕組みについてよく理解したい	-.067	.441	.056
D.15 何かを始めるときは計画を立ててから取り組む	-.006	.423	-.001
D.52 外国の人の意見や考え方について知りたい	.078	.415	.093
D. 7 計画的に物事を進めるタイプだ	-.014	.411	-.045
D.33 将来はいろいろな情報を集める仕事をしたい	-.012	.404	-.035
D.47 何か失敗したらまずその原因を考える	.059	.384	.076
D.57 新聞や雑誌にはよく目を通す	.086	.368	-.089
D.41 何かを調べたりまとめるような授業は楽しい	.102	.360	.100
D.20 テレビではニュースや報道番組をよく見る	.011	.354	.070
D.23 慎重な性格だと思う	-.207	.344	.077
D.63 落ち着いていると言われる	-.267	.327	.080
D.12 図書館や本屋によくかける	-.129	.314	.083
D.17 流行に関する情報は雑誌やインターネットでチェックする	.138	.313	-.168
D.25 パソコンを使うのが得意だ	-.036	.302	-.024
D. 4 本を読むのが好きだ	-.135	.286	.101
D.60 遠い国の人々の暮らしに興味がある	.099	.278	.201
D.31 いったん始めたことは忍耐強くやりとげる方だ	.126	.257	.071
D.39 自分の持ち物や道具の手入れはきちんとしている	.075	.250	.091
T.11 工作や物作りが好きだ	-.056	-.040	.628
T.43 机や本棚を自分で作ってみたい	.000	-.017	.554
T. 3 指先を使って物を組み立てるのが得意だ	-.082	.062	.516
T.51 美術や図工の時間は楽しい	.039	-.019	.490
T.27 物を作り出すような仕事をしたい	-.082	.072	.485
T. 6 自分で野菜や果物を栽培したい	.052	.000	.451
T.22 牧場や農場で働いてみたい	.029	-.066	.439
T.14 動物の飼育や植物の世話が好きだ	.140	-.085	.428
T.38 星や動植物をじっくり観察するのが好きだ	-.032	.106	.423
T.19 手先が器用だと思う	-.048	.088	.395
T.35 大工道具やドライバーなどの道具類はうまく使える	-.023	.055	.395
T.62 博物館や科学館に行くのが好きだ	-.083	.180	.384
T.59 こわれた物があると何とか直せないか試してみる	.054	.101	.370
T.46 山や海に出かけるのが好きだ	.241	-.069	.369
T.30 自然公園やアスレチックに行くのが好きだ	.298	-.066	.328
T.54 外国に旅行するなら自然の豊かな国がいい	.122	-.016	.317

因子間相関	F1	F2	F3
F1	1		
F2	.218	1	
F3	.126	.259	1

図表 13 第3版の尺度構成に基づいたB検査の信頼性係数（中学生）

下位検査/領域・志向性	クロンバックの α 係数	第3版作成時の α 係数 (参考)
B検査	D志向	.81
	P志向	.86
	T志向	.80

※第3版作成時のクロンバックの α 係数は中学、高校込みの28070名で算出している。

※上記は2007-2017年度のデータ(n=38,622)で算出したが、2013-2016年度の直近のデータ(n=15,799)で算出した場合でも α 係数はすべて上記と同値となった。

(3) 下位尺度の規準得点の妥当性に関する検証

職業レディネス・テストでは、各検査ともそれぞれの下位尺度毎に粗点を算出し、換算表を用いて粗点を標準得点に換算した後、標準得点を用いて各下位尺度のプロフィールを作成する。標準得点は、標準化を行ったときの規準集団の平均値、得点の分布に基づいて算出されているため、年月の経過とともに中学生、高校生の各下位尺度得点の平均値や得点の分布が大きく変化してしまうと、従来の換算規準を用いた標準得点は、現在の中学生、高校生の平均的な集団の特徴を反映した結果とはいえなくなる。

そこで、今回、提供を受けた中学生全体のデータを用いて各検査、下位尺度毎に平均値と標準偏差を求めた。今回のデータには2007年度から2017年度までのデータで構成されているため、直近の年度の回答のみで分析することも検討したが、直近の年度だけをとりだすと学校の所在地域の偏りが生じたり、全体に占める特定の学校の構成割合が大きくなる可能性がある。そこで、2007年度から2017年度全体のデータで平均値と標準偏差を求めることとした。その上で、経年的な変化をみるため、年度毎の平均値と標準偏差も算出し、各下位尺度の平均値が時系列で見たときに徐々に上昇、下降するなどの一定の変化の傾向がみられるかどうかを検討した。

①男女別の各下位尺度得点の平均値と標準偏差

A検査（職業興味）とC検査（自信度）の分析にあたっては、第3版の採点方法に従い、「やりたい、自信がある」を2点、「どちらともいえない」を1点、「やりたくない、自信がない」を0点として得点化した上で、RIASECの6領域に対応する9項目の合計得点を算出した。B検査（基礎的志向性）については、「あてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点と得点化した上で、DPTそれぞれの対応項目の合計得点を算出した。

職業レディネス・テストでは換算規準は男女別で作成されているため、各検査の下位尺度毎に合計得点の平均値（mean）と標準偏差（SD）を男女別に算出した。結果を図表14に示す。表には、参考のため第3版作成時の平均値（mean）と標準偏差（SD）も記載している。なお、A検査とC検査については、各領域の項目数が同じであるため得点の幅は0点から18点となり、相互に比較可能であるが、B検査（基礎的志向性）では対情報志向

(D) と対人志向 (P) はそれぞれ 24 項目 (0 から 24 点)、対物志向 (T) は 16 項目 (0 から 16 点) であるため、この表において 3 つの志向性間での得点の高低は比較できない。図表 14 の平均値をみると、A 検査 (職業興味)、B 検査 (基礎的志向性)、C 検査 (自信度) の各下位尺度の平均値は第 3 版作成時の値と比較して、それほど大きな変化はみられない。また、今回データと第 3 版作成時の A 検査と C 検査の平均値について男女別にグラフにしたものが図表 15 である。

図表 14 中学生男女別の各下位尺度得点の平均値 (mean) と標準偏差 (SD)

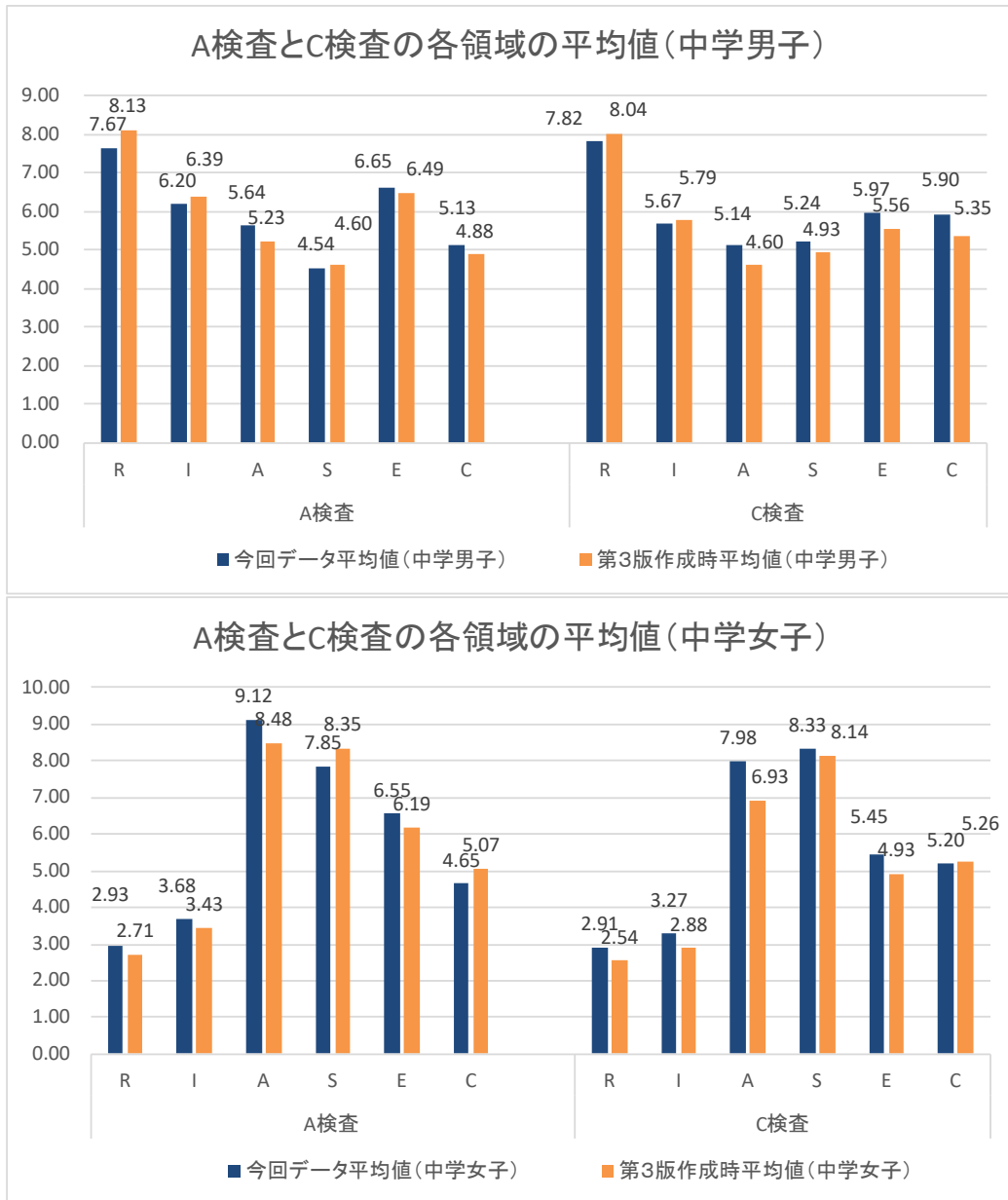
下位検査/領域		男子(中学生)				女子(中学生)			
		今回データ(n=20023)		第3版作成時(n=5596)		今回データ(n=18599)		第3版作成時(n=5370)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	7.67	(4.79)	8.13	(4.86)	2.93	(3.48)	2.71	(3.40)
	I領域	6.20	(5.00)	6.39	(4.95)	3.68	(4.35)	3.43	(4.13)
	A領域	5.64	(4.38)	5.23	(4.26)	9.12	(4.94)	8.48	(4.80)
	S領域	4.54	(3.98)	4.60	(3.90)	7.85	(4.69)	8.35	(4.56)
	E領域	6.65	(4.57)	6.49	(4.49)	6.55	(4.53)	6.19	(4.26)
	C領域	5.13	(4.42)	4.88	(4.33)	4.65	(4.35)	5.07	(4.45)
B検査	D志向	10.40	(5.18)	9.98	(5.19)	10.84	(4.78)	10.50	(4.72)
	P志向	14.38	(5.33)	13.79	(5.27)	15.56	(4.80)	15.95	(4.55)
	T志向	8.11	(3.96)	7.87	(3.96)	7.57	(3.78)	7.13	(3.73)
C検査	R領域	7.82	(5.11)	8.04	(5.05)	2.91	(3.59)	2.54	(3.33)
	I領域	5.67	(5.12)	5.79	(5.00)	3.27	(4.26)	2.88	(3.88)
	A領域	5.14	(4.49)	4.60	(4.16)	7.98	(4.96)	6.93	(4.67)
	S領域	5.24	(4.50)	4.93	(4.14)	8.33	(4.98)	8.14	(4.65)
	E領域	5.97	(4.81)	5.56	(4.61)	5.45	(4.51)	4.93	(4.23)
	C領域	5.90	(5.09)	5.35	(4.86)	5.20	(4.85)	5.26	(4.73)

注：今回データとしては 2007 年度から 2017 年度全体のデータを用いている。

今回の平均値と第 3 版作成時の平均値を比べて比較差が大きかった領域をみると、男子の場合、今回の平均値の方が高くなった領域としては、C 検査 (自信度) の芸術的領域 (A) と慣習的領域 (C) があつた。芸術的領域 (A) では、今回の平均値が+.54、慣習的領域 (C) では今回の方が+.55 高くなった。一方で、第 3 版作成時より今回のデータの平均値が低くなった領域としては、A 検査 (職業興味) の現実的領域 (R) があつた、今回の方が-.46 低かつた。

女子では、今回のデータの値が第 3 版作成時より高くなった領域として芸術的領域 (A) があつた、A 検査 (職業興味) で+.64、C 検査 (自信度) で+1.05 高くなった。また、C 検査 (自信度) では企業的領域 (E) も高かつた (+.52)。今回のデータの方で平均値が低かつたのは A 検査 (職業興味) の社会的領域 (S) であつた (-.50)。以上から、今回のデータ全体では、女子における C 検査 (自信度) の芸術的領域 (A) の平均値が第 3 版作成時に比べて、領域の合計点の平均値が約 1 点程度大きくなつてゐることが最も大きな変化である。

図表 15 中学生男女別の A 検査と C 検査の各下位尺度得点の平均値



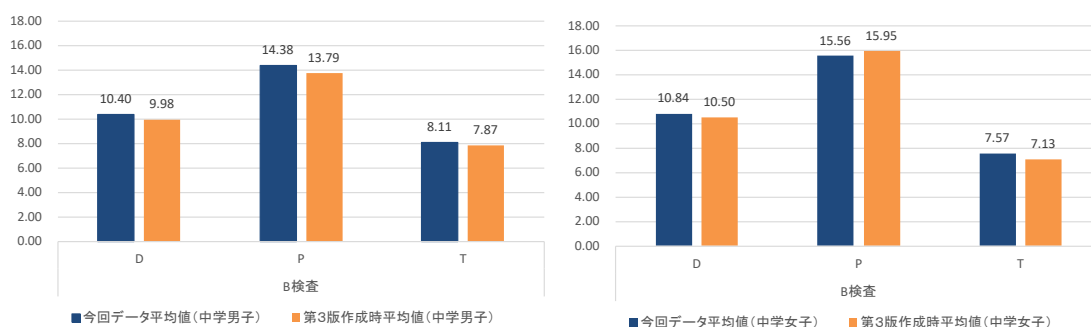
また、男女別に A 検査（職業興味）と C 検査（自信度）の下位尺度ごとの平均値の高さを領域で順位づけしてみると、男子では、A 検査（職業興味）において REIACS の順となり、これは第 3 版作成時と同じ並びである。C 検査（自信度）では、現実的領域（R）が最も高く、それ以外の領域の平均値にはあまり差がないが、高い順に RECISA の順となった。第 3 版作成時の男子の C 検査（自信度）では、高い方から RIECSA の順になっているので、今回のデータでは研究的領域（I）の順位が第 3 版よりもやや低めだった。女子をみると今回のデータの A 検査（職業興味）では、高い順に ASECIR の順となり、第 3 版

での順位と一致した。C 検査 (自信度) では、今回のデータでは高い順に SAECIR となり、第3版作成時では SACEIR であったので、今回のデータでは企業的領域 (E) と慣習的領域 (C) の順位が入れ替わり、その他は同じだった。ただ、慣習的領域 (C) の平均値は今回のデータと第3版作成時のデータでそれほど違っていないので、今回のデータで企業的領域 (E) の自信度が高めとなったことが順位に影響したと解釈できる。

以上、C 検査 (自信度) に関して、男子では第3版作成時よりも今回の方が研究的領域 (I) の順位がやや低くなり、女子では企業的領域 (E) が第3版作成時より高めとなっている点で順位の入替わりが見られたが、A 検査 (職業興味) に関しては男女ともに今回のデータと第3版作成時の平均値に関する領域の順位が一致した。

次に B 検査 (基礎的志向性) に関して、今回のデータと第3版の平均値をグラフにしたものを図表 16 に示す。今回のデータと第3版作成時の平均値には大きな違いはみられない。男子の対人志向 (P) において第3版作成時よりも今回データの方が.59 高くなっていた点が、最も大きな違いである。

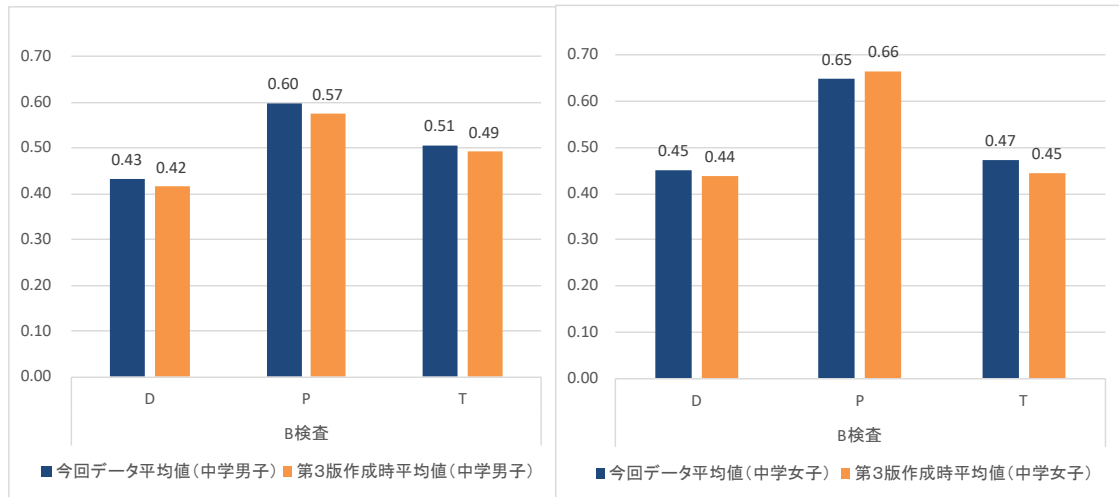
図表 16 中学生男女別の B 検査の各下位尺度得点の平均値



なお、図表 16 のグラフで用いている平均値は各志向性の合計得点を用いたが、対物志向 (T) は対情報志向 (D)、対人志向 (P) より項目数が少ないため、3つの志向性の得点を相互に比較することができない。そこで、得点の高さを志向性間で比較できるよう、各志向性の合計得点の平均値をそれぞれの項目数で除した値を算出し、グラフにしたものが図表 17 である。

3つの志向性を比較すると、男女ともに対人志向 (P) が最も高く、次に高いのは対物志向 (T) で、最後が対情報志向 (D) である。また、全体として今回のデータの方で第3版作成時よりもやや得点が高くなっている中で、女子の対人志向 (P) の得点だけは今回データの方が第3版作成時より低くなったという傾向の違いはあるが、変化はそれほど大きいものではなく、全体としては B 検査においても今回のデータと第3版作成時のデータで各志向性の得点の傾向は大きく変わっていない。

図表 17 中学生男女別の B 検査の各志向性の相互比較
 (各志向性の合計点を項目数で除した値の平均値)



②男女別の各下位尺度得点の平均値と標準偏差（経年比較）

次に、2007 年度から 2017 年度の各年度において男女別に各下位尺度の得点の平均値（mean）と標準偏差（SD）を算出した結果を図表 18 に示す。2017 年度は他の年度に比べて男女ともデータ件数が少なくなっているが、参考として記載した。

さらに、長期的な期間での平均値の変化をみるため、検査ごとに男女別の平均値を用いてグラフにしたものが図表 19～図表 21 である。

【A 検査（職業興味）の各領域の平均値の推移】

A 検査（職業興味）の平均値をみると（図表 19）、男女ともに年度によって多少の得点の上下はあるがほぼ横ばいに推移している。ただ、グラフをみると女子の現実的領域（R）では、2012 年度までは 3.0 未満であったのが、近年は 3.0 を少し超えた水準となり、得点が若干高めとなっている傾向はある。そこで、女子の現実的領域（R）について 11 年の平均値を一元配置の分散分析によって検定した。その結果、年度間で有意差がみられ（ $F=8.32; p<.01$ ）、Tukey 法による多重比較の結果、2013、2014、2015、2016、2017 年度の平均値は、2008、2010、2011 年度の平均値よりも高くなった（ $p<.01$ ）。女子では、職業興味に関して、現実的領域（R）の平均値が 2013 年度以降、その前の年度よりも高めになっていることが示された。

図表 18 中学生における各年度下位尺度の平均値 (mean) と標準偏差 (SD)

男子

下位検査／領域		2007(n=1661)		2008(n=1880)		2009(n=1577)		2010(n=1957)		2011(n=2003)		2012(n=1800)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	7.49	(4.79)	8.20	(4.65)	7.52	(4.83)	7.74	(4.74)	7.80	(4.88)	8.05	(4.83)
	I領域	6.36	(5.01)	6.65	(4.97)	6.21	(5.07)	6.20	(4.99)	6.18	(5.02)	6.02	(4.95)
	A領域	5.41	(4.33)	5.66	(4.36)	5.61	(4.52)	5.78	(4.39)	5.83	(4.42)	5.35	(4.32)
	S領域	4.37	(3.91)	4.49	(3.90)	4.43	(3.93)	4.56	(3.88)	4.57	(4.03)	4.54	(3.97)
	E領域	6.34	(4.48)	6.60	(4.45)	6.74	(4.51)	6.89	(4.49)	7.04	(4.64)	6.54	(4.51)
B検査	C領域	4.82	(4.30)	5.16	(4.38)	5.11	(4.47)	5.08	(4.37)	5.21	(4.54)	4.86	(4.28)
	D志向	10.07	(5.29)	10.19	(5.20)	10.02	(5.28)	9.96	(5.21)	10.50	(4.93)	10.25	(5.25)
	P志向	13.84	(5.36)	14.15	(5.07)	13.95	(5.36)	14.37	(5.20)	14.35	(5.33)	14.26	(5.47)
C検査	T志向	7.81	(3.98)	8.17	(3.88)	7.81	(4.03)	8.02	(3.98)	7.99	(3.94)	8.29	(3.93)
	R領域	7.55	(5.06)	8.12	(4.93)	7.75	(5.11)	7.85	(5.04)	7.92	(5.17)	8.22	(5.12)
A検査	I領域	5.84	(5.09)	5.86	(5.03)	5.69	(5.16)	5.66	(4.97)	5.69	(5.10)	5.67	(5.13)
	A領域	4.82	(4.34)	5.05	(4.44)	5.14	(4.57)	5.28	(4.40)	5.32	(4.59)	5.06	(4.53)
	S領域	4.89	(4.30)	5.22	(4.43)	5.29	(4.53)	5.16	(4.36)	5.38	(4.54)	5.20	(4.51)
	E領域	5.58	(4.61)	5.84	(4.66)	6.07	(4.78)	6.10	(4.69)	6.29	(4.85)	5.89	(4.82)
	C領域	5.55	(5.00)	5.93	(5.05)	6.07	(5.13)	5.65	(4.93)	5.97	(5.12)	5.68	(4.98)

下位検査／領域		2013(n=1951)		2014(n=1808)		2015(n=1928)		2016(n=2468)		2017(n=990)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	7.66	(4.71)	7.84	(4.85)	7.50	(4.86)	7.20	(4.76)	7.22	(4.68)
	I領域	6.37	(5.01)	6.45	(5.01)	5.88	(4.94)	5.88	(4.99)	6.03	(5.08)
	A領域	5.75	(4.35)	5.72	(4.41)	5.58	(4.41)	5.51	(4.28)	5.92	(4.55)
	S領域	4.71	(4.03)	4.77	(4.06)	4.56	(4.03)	4.34	(3.92)	4.78	(4.21)
	E領域	6.86	(4.58)	6.79	(4.63)	6.32	(4.60)	6.37	(4.59)	6.66	(4.80)
B検査	C領域	5.15	(4.30)	5.24	(4.52)	5.29	(4.53)	5.21	(4.40)	5.24	(4.52)
	D志向	10.45	(5.12)	10.61	(5.31)	10.87	(5.11)	10.70	(5.15)	10.72	(5.02)
	P志向	14.73	(5.25)	14.72	(5.43)	14.50	(5.42)	14.56	(5.35)	14.64	(5.41)
C検査	T志向	8.27	(3.94)	8.45	(3.96)	8.15	(4.00)	8.01	(3.91)	8.19	(3.95)
	R領域	7.89	(5.07)	8.00	(5.20)	7.67	(5.18)	7.51	(5.17)	7.43	(5.03)
A検査	I領域	5.87	(5.20)	5.91	(5.26)	5.44	(5.07)	5.36	(5.11)	5.42	(5.33)
	A領域	5.25	(4.42)	5.09	(4.48)	5.20	(4.52)	5.08	(4.46)	5.33	(4.66)
	S領域	5.49	(4.60)	5.43	(4.58)	5.12	(4.50)	5.08	(4.49)	5.56	(4.71)
	E領域	6.23	(4.84)	5.98	(4.93)	5.82	(4.86)	5.83	(4.86)	6.03	(5.08)
	C領域	6.09	(5.09)	5.96	(5.21)	5.98	(5.13)	6.02	(5.09)	6.03	(5.28)

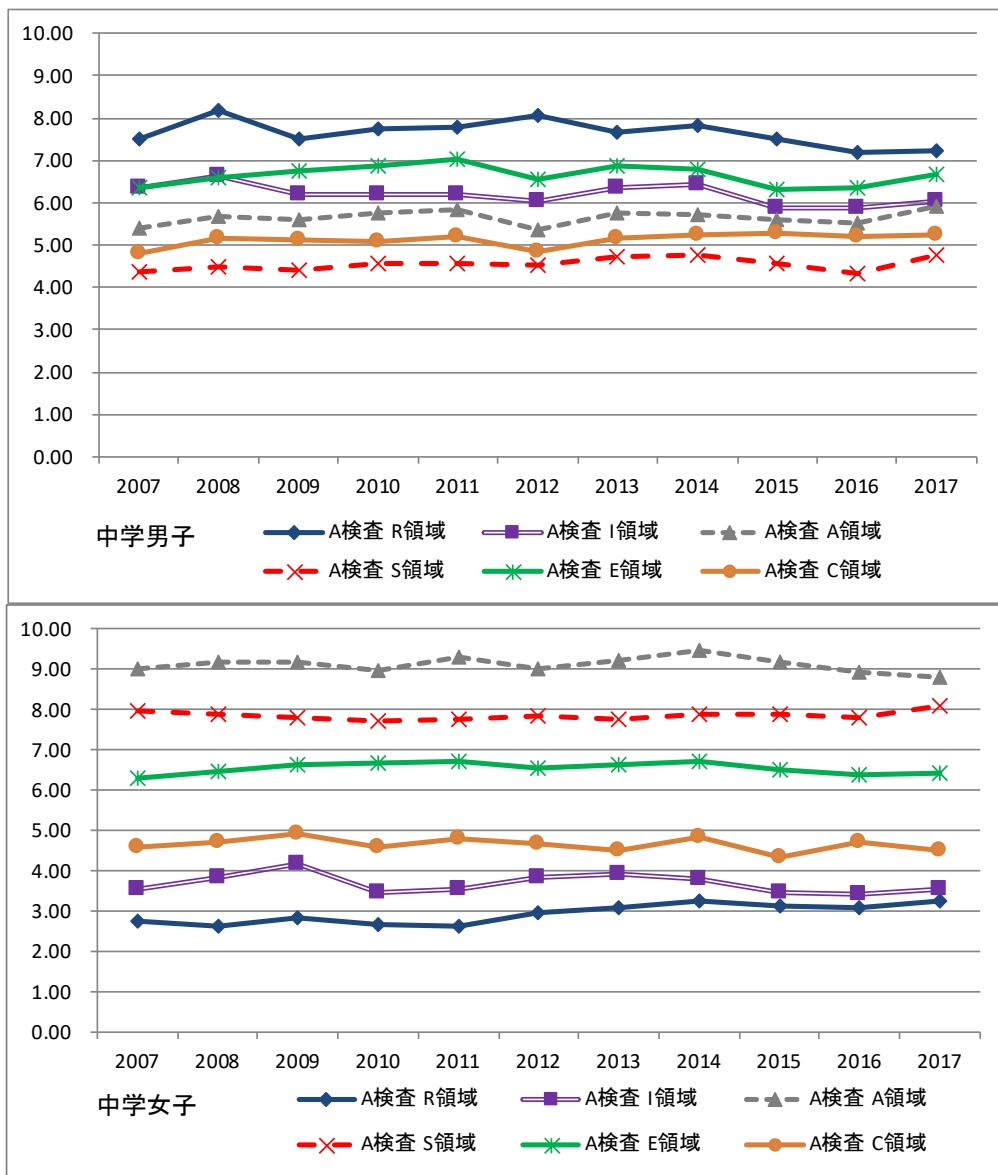
女子

下位検査／領域		2007(n=1432)		2008(n=1876)		2009(n=1405)		2010(n=1652)		2011(n=1897)		2012(n=1799)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	2.73	(3.34)	2.61	(3.22)	2.83	(3.45)	2.67	(3.32)	2.64	(3.21)	2.97	(3.53)
	I領域	3.56	(4.13)	3.83	(4.33)	4.18	(4.69)	3.48	(4.21)	3.56	(4.26)	3.83	(4.46)
	A領域	9.02	(4.96)	9.16	(4.89)	9.19	(5.10)	8.96	(4.86)	9.29	(4.82)	8.99	(4.98)
	S領域	7.97	(4.72)	7.89	(4.64)	7.80	(4.54)	7.72	(4.59)	7.76	(4.62)	7.83	(4.63)
	E領域	6.29	(4.45)	6.48	(4.43)	6.64	(4.56)	6.69	(4.47)	6.71	(4.52)	6.54	(4.53)
B検査	C領域	4.59	(4.16)	4.69	(4.30)	4.90	(4.47)	4.57	(4.22)	4.78	(4.33)	4.66	(4.39)
	D志向	10.74	(4.70)	10.78	(4.64)	10.95	(4.73)	10.59	(5.01)	10.75	(4.82)	10.65	(4.90)
	P志向	15.65	(4.68)	15.53	(4.67)	15.39	(4.58)	15.64	(4.66)	15.58	(4.69)	15.42	(4.87)
C検査	T志向	7.25	(3.70)	7.20	(3.76)	7.36	(3.86)	7.28	(3.81)	7.37	(3.74)	7.59	(3.83)
	R領域	2.68	(3.42)	2.72	(3.52)	2.84	(3.59)	2.72	(3.54)	2.71	(3.41)	2.85	(3.52)
A検査	I領域	3.18	(4.07)	3.43	(4.29)	3.71	(4.65)	3.16	(4.18)	3.24	(4.20)	3.27	(4.21)
	A領域	7.86	(4.96)	8.07	(4.92)	7.94	(4.99)	7.89	(4.94)	8.13	(4.93)	7.72	(4.93)
	S領域	8.34	(4.95)	8.33	(4.85)	8.30	(4.88)	8.16	(4.92)	8.16	(4.92)	8.23	(4.87)
	E領域	5.30	(4.45)	5.38	(4.37)	5.43	(4.49)	5.60	(4.50)	5.48	(4.54)	5.36	(4.48)
	C領域	5.26	(4.68)	5.28	(4.80)	5.54	(5.01)	5.18	(4.75)	5.20	(4.69)	5.25	(4.87)

下位検査／領域		2013(n=1845)		2014(n=1727)		2015(n=1804)		2016(n=2268)		2017(n=894)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	3.09	(3.59)	3.24	(3.68)	3.14	(3.51)	3.10	(3.67)	3.26	(3.60)
	I領域	3.91	(4.48)	3.78	(4.44)	3.48	(4.27)	3.42	(4.26)	3.56	(4.32)
	A領域	9.23	(4.94)	9.49	(5.00)	9.17	(4.90)	8.95	(4.94)	8.79	(5.06)
	S領域	7.76	(4.60)	7.89	(4.82)	7.90	(4.84)	7.82	(4.79)	8.10	(4.73)
	E領域	6.62	(4.43)	6.72	(4.63)	6.52	(4.54)	6.39	(4.62)	6.42	(4.64)
B検査	C領域	4.50	(4.35)	4.83	(4.40)	4.34	(4.32)	4.71	(4.47)	4.51	(4.34)
	D志向	10.79	(4.76)	11.14	(4.80)	11.02	(4.62)	11.05	(4.81)	10.68	(4.80)
	P志向	15.65	(4.66)	15.59	(4.94)	15.63	(4.93)	15.49	(5.00)	15.69	(5.09)
C検査	T志向	7.73	(3.79)	7.99	(3.76)	7.91	(3.69)	7.83	(3.75)	7.72	(3.88)
	R領域	2.99	(3.58)	3.08	(3.72)	3.05	(3.61)	3.13	(3.79)	3.25	(3.79)
A検査	I領域	3.47	(4.38)	3.29	(4.25)	3.01	(4.23)	3.09	(4.21)	3.21	(4.19)
	A領域	8.05	(4.91)	8.26	(4.98)	7.99	(4.90)	7.99	(4.97)	7.69	(5.18)
	S領域	8.34	(4.97)	8.44	(5.07)	8.39	(5.16)	8.32	(5.07)	8.88	(5.11)
	E領域	5.58	(4.51)	5.63	(4.50)	5.32	(4.49)	5.40	(4.59)	5.52	(4.73)
	C領域	5.22	(4.85)	5.26	(4.95)	4.82	(4.83)	5.25	(5.04)	4.87	(4.82)

なお、第3版作成時の標準化データにおいて職業興味の得点で6領域を順位づけると、男子では REIACS、女子では ASECIR の順であったが、今回のデータで長期的にみた場合でも、男女ともに6領域の平均値の順位は第3版作成時の平均値の順位とほぼ一致しており、大きく変化していない。今回のデータでは、中学生女子の職業興味において現実的領域（R）の得点が近年、以前より高めになっている傾向はみられたが、6領域の得点を相互に比較した時、現実的領域（R）の得点が一番低いという点では第3版作成時と変わらない。

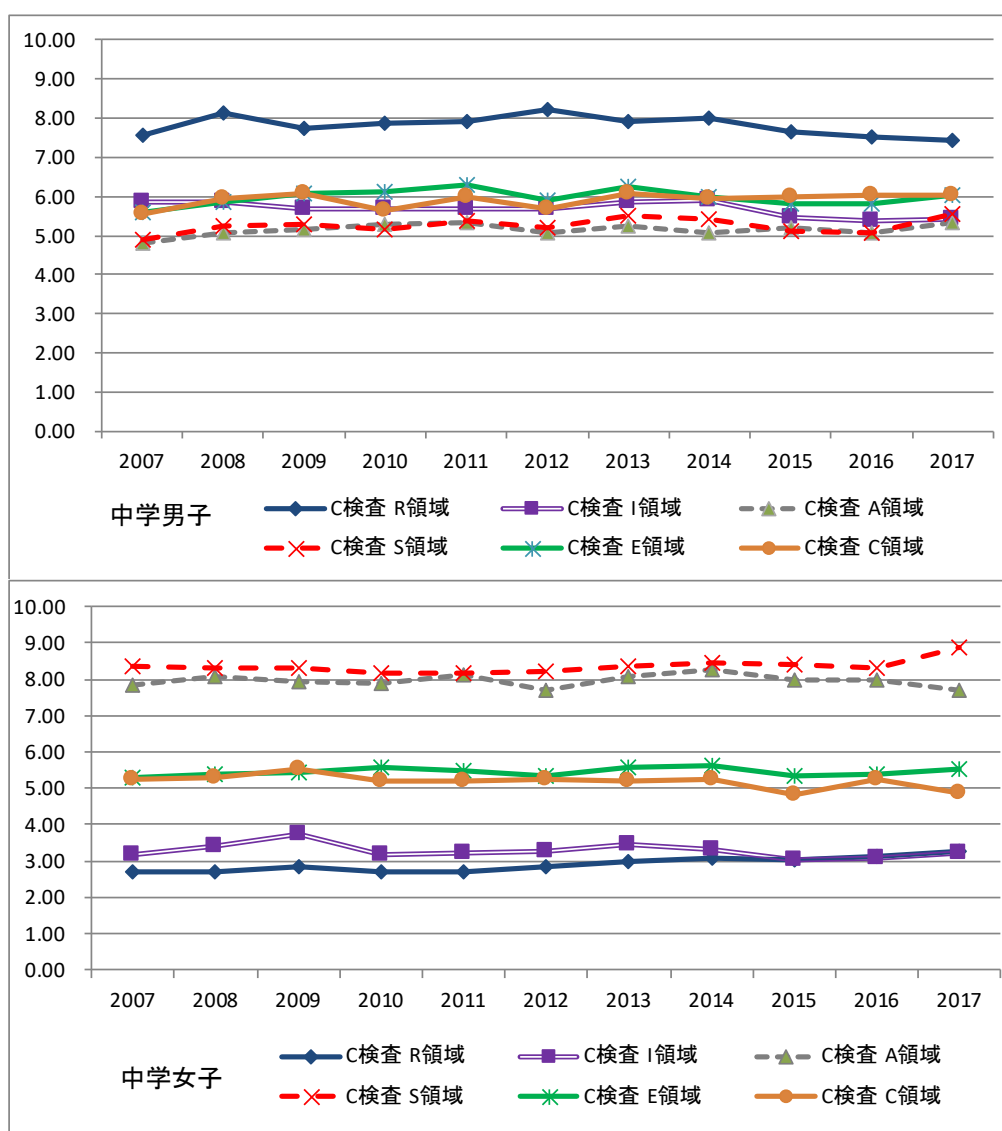
図表 19 A検査（職業興味）における中学生男女別にみた下位尺度得点平均値の経年変化



【C 検査（自信度）の各領域の平均値の推移】

次に C 検査（自信度）の結果を図表 20 に示す。男女ともに各年度の平均値は水平に推移しており大きな変化は見られない。ただ、A 検査（職業興味）と同様に、女子において現実的領域（R）の得点が 2012 年度以降、3.0 をやや上回っており、それ以前に比べて得点が高めとなっている。一元配置の分散分析の結果、年度間の平均値で有意差がみられ（ $F=4.72, p<.01$ ）、多重比較の結果（Tukey 法）、2016 年度と 2017 年度の平均値は 2007、2008、2010、2011 年度の平均値よりも大きいことがわかった（ $p<.05$ ）。女子では、現実的領域（R）に関して、興味と同様に職務遂行の自信度についても近年で得点が高くなっていることが示された。

図表 20 C 検査における中学生男女別にみた下位尺度得点平均値の経年変化



6領域の年度全体を通した水準をみると、C検査（自信度）では男子では現実的領域（R）の平均値が最も高いが、その他の5つの領域には大きな差がなく、ほぼ同じ水準となっている。第3版作成時の6領域の自信度の平均値は高い順に RIECSA であった。今回のデータでも現実的領域（R）が最も高く、その他は領域間で得点に大きな差はないが、細かく見れば、社会的（S）と芸術的領域（A）が他より低めという点においても一致した傾向がみられた。

女子では社会的（S）と芸術的領域（A）が同程度に高く、次が企業的（E）、慣習的（C）が同程度の高さを示し、一番低い水準で推移しているのが研究的（I）と現実的領域（R）である。領域の略号で示すと、年度によって隣接領域の順位が入れ替わっているところもあるが、おおむね上から順に SAECIR となっていた。第3版作成時の各領域の自信度の平均値を高い順にみると SACEIR であったため、各領域に対する自信度の得点全体の傾向としては今回のデータにおいても大きく変わらない結果が得られた。ただ、細かくみていくと、今回のデータでは、芸術的領域（A）が全体的に高い値となっているため、社会的領域（S）との差が小さくなった。また、年度によっては企業的領域（E）が慣習的領域（C）よりも高い場合があること、2015年以降は、研究的領域（I）よりも現実的領域（R）の得点が高くなったことが相違点である。

なお、年度をこみにした全体の平均値において、女子の芸術的領域（A）の平均値は、第3版作成時のデータよりも職業興味、自信度ともに高い値を示し（図表15）、特に自信度では1.05高くなっていた。ただ経年変化をみると、今回のデータでは11年間の最初にあたる2007年度から、第3版の値（6.93）より1点程度高い値（7.86）となっている。このことから上記の結果は、芸術的領域（A）が年月の経過に伴って変化したということではなく、今回の中学生女子のデータの芸術的領域（A）の平均値がもともと高いことを反映したものと推察される。また、中学生女子の自信度において、企業的領域（E）も第3版より高めとなったが（+.52）、一元配置の分散分析で各年度の平均値の比較をした結果、有意差は検出されず年月の経過に伴う変化とみることはできない。

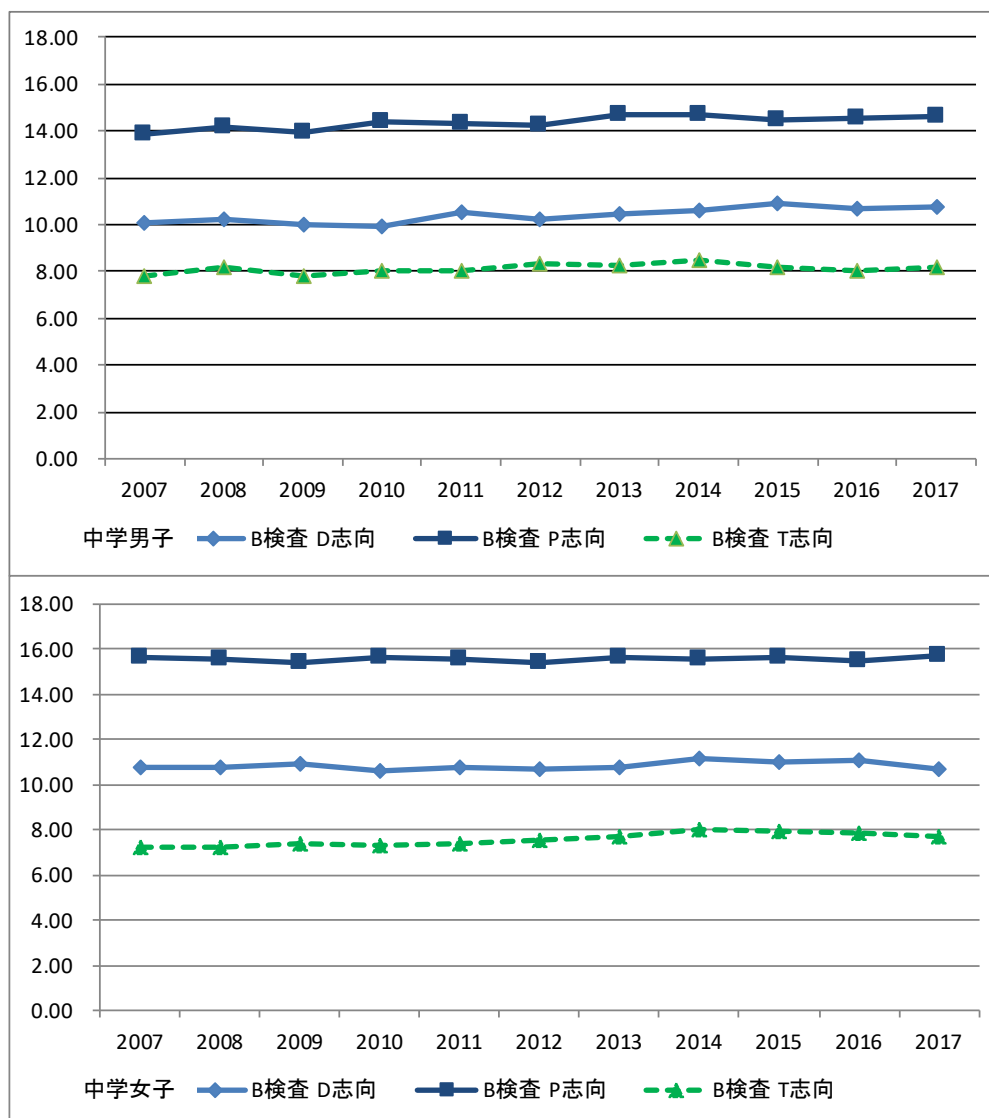
以上のことから、A検査（職業興味）とC検査（自信度）に関する6領域の平均値の変化に関しては、男子では特徴的な変化は確認されず、女子の現実的領域（R）において、興味も自信も以前に比べて高めの傾向がみられたことが留意点である。

【B検査（基礎的志向性）の各志向性の平均値の推移】

B検査（基礎的志向性）の平均値の推移を図表21に示す。平均値の推移をみると、男女ともにどの志向性の平均値もほぼ水平のレベルで推移しており、年度による顕著な上昇傾向、下降傾向はみられない。ただ、数値の大きさを厳密にみると、男子において対情報志向（D）と対人志向（P）が近年、やや高めになっていること、女子において対物志向（T）が近年、やや高めになっていることが読み取れる。そこで、男子に関しては、対情報志向

(D) と対人志向 (P) について、女子に関しては、対物志向 (T) でそれぞれ年度ごとの平均値を変数として一元配置の分散分析を行った。

図表 21 B 検査における中学生男女別にみた下位尺度得点平均値の経年変化



※注：T志向はD志向、P志向よりも項目数が少ないので、志向性間での水準の比較はできない。

男子の対情報志向 (D)、対人志向 (P) では年度間の平均値にそれぞれ有意差がみられた ($F=6.64, p<.01$; $F=5.33, p<.01$)。多重比較の結果 (Tukey 法)、対情報志向 (D) では、2015、2016 年度が 2007、2008、2009、2010 年度の平均値よりも高いことがわかった ($p<.05$)。さらに 2017、2014 年度は 2009、2010 年度より高く、2011 年度は 2010 年度より高く、2015 年度は 2012 年度より高かった ($p<.05$)。対人志向 (P) では、2013 年以降の平均値は 2007 年度の平均値よりも高かった ($p<.05$)、また 2013、2014 年度の平均

値は 2008、2009 年度より高く、2016 年度は 2009 年度より高かった ($p<.05$)。以上、男子の平均値については、いくつかの年度間で有意差も検出されたが、概して対情報志向 (D) と対人志向 (P) は近年において、以前よりも若干高めで推移していることが示された。

次に女子の対物志向 (T) であるが、分散分析の結果、有意差が得られ ($F=9.93, p<.01$)、多重比較の結果 (Tukey 法)、2014~2016 年度は、2007~2011 年度よりも高かった ($p<.05$)。また、2013 年度は 2007、2008、2010 年度よりも高く、2017 年度は 2008 年度よりも高かった ($p<.05$)。このことから、特に 2013 年度以降の近年において対物志向 (T) の平均値が 2011 年度以前に比べ、高くなっていることが示された。対物志向 (T) は、職業興味や職務遂行の現実的領域 (R) との関連が高いことなどもあわせて考えると変化の方向性としては一貫しており、従来に比べて中学生女子における物作りや自然を扱うような活動に対する興味、自信、志向性が高まっている傾向が今回のデータから示唆されている。

(4) 中学生の結果のまとめ

以上、中学生のデータを用いて、職業レディネス・テストの A 検査、B 検査、C 検査の各下位尺度の構造および平均値の大きさと経年変化の傾向に関する結果を示した。尺度の構造に関しては、職業興味において企業的領域 (E) の 1 項目で芸術的領域 (A) に含まれる項目群との関連が示されたが、本来の領域別の項目グループで算出した尺度としての信頼性は第 3 版と同程度に保たれていた。

また、換算規準の検討として、各検査、各下位尺度の平均値をみたところ、今回のデータにおいては女子において芸術的領域 (A) の平均値が職業興味、職務遂行の自信度ともに高いことが示された。ただし、芸術的領域 (A) の平均値は 2007 年度当初から高く、経年変化によるものではない。他方、経年変化としてみられたのは、女子では現実的領域 (R) が職業興味、職務遂行の自信度ともに近年で高くなったこと、男子では、B 検査 (基礎的志向性) で対情報志向 (D)、対人志向 (P) が以前よりも高くなっていることであった。ただ、これらの得点の変化は、17 年間を通した平均値と第 3 版の規準値との差が 1.0 未満という水準におさまっており、現時点での換算規準の適用に影響を及ぼすほどの変化であるとはいえない。

4. 高校生データに関する検討結果

(1) 学科構成からみた今回のデータの特徴とサンプリング

高校生のデータについては「2.方法」で述べた通り、学校基本調査の学科コード表に従って個々のデータに学科コードを振った。その後、学科コードに基づいて職業レディネス・テスト第 3 版作成時に用いたものと同じの学科グループコードを新たに付けた。すなわち、

①普通科、②農業+水産、③工業+情報、④商業、⑤家庭+看護+福祉、⑥その他+総合である。①～⑥に該当しない場合には⑦の学科グループコードをつけた。

高校生のデータは3学年の男女で347,362名分であった(学年、男女別内訳は図表2参照)。これを男女別、学科グループコード別に集計した結果を図表22に示す。この表をみると、今回集められたデータの学科別内訳は、普通科が全体の約3割程度となっており、普通科以外の学科に在学する生徒の割合が多いことがわかる⁹。

図表 22 高校生の男女別、学科グループコード別の集計結果

		①普通	②農業+水産	③工業+情報	④商業	⑤家庭+看護+福祉	⑥その他+総合	⑦上記以外	全体計
全体	人数	112,425	34,215	96,195	58,938	13,155	30,906	1,528	347,362
	割合(%)	32.37	9.85	27.69	16.97	3.79	8.90	0.44	100
男子	人数	55,646	19,066	86,250	20,969	1,280	13,621	837	197,669
	割合(%)	28.15 (16.02)	9.65 (5.49)	43.63 (24.83)	10.61 (6.04)	0.65 (0.37)	6.89 (3.92)	0.42 (0.24)	56.91
女子	人数	56,779	15,149	9,945	37,969	11,875	17,285	691	149,693
	割合(%)	37.93 (16.35)	10.12 (4.36)	6.64 (2.86)	25.36 (10.93)	7.93 (3.42)	11.55 (4.98)	0.46 (0.20)	43.09

※男女別の欄の割合は、男子計、女子計それぞれに占める各学科生徒数の割合。()内の数字は、全体計の人数に占める、男女別各学科人数の割合。

次に、職業レディネス・テスト第3版の標準化の際に集めた高校生データの学科構成を図表23に示す。標準化の際には、当時の高校生の学科構成等についても考慮して、普通科進学率70%未満(7,668名)、普通科進学率70%以上(4,441名)、農業+水産(786名)、工業+情報(1,818名)、商業(1,032名)、家庭+看護+福祉(778名)、その他+総合(581名)という構成でデータが集められた。今回のデータでは、学校名は削除されていることから、進学率による条件は入れることができず、普通科は進学率に関わらず1つのグループにまとめられている。

図表 23 職業レディネス・テスト第3版作成時の標準化データの高校生の学科構成

学科		普通科進学率 70%未満	普通科進学率 70%以上	農業+水産	工業+情報	商業	家庭+看護+福祉	その他+総合	計
全体	人数	7668	4441	786	1818	1032	778	581	17104
	割合(%)	44.83	25.96	4.60	10.63	6.03	4.55	3.40	100.00
男子	人数	3723	2210	429	1566	236	8	237	8409
	割合(%)	44.27	26.28	5.10	18.62	2.81	0.10	2.82	100.00
女子	人数	3945	2231	357	252	796	770	344	8695
	割合(%)	45.37	25.66	4.11	2.90	9.15	8.86	3.96	100.00

このように今回の高校生のデータについては、学科構成で見ると、職業レディネス・テスト第3版作成時の標準化データや平成29年度の全国の全日制高等学校の高校生の所属

⁹ 平成29年度学校基本調査(文部科学省)をみると、全日制の高等学校において、全体の生徒数に占める上記の各学科グループコード別の生徒数(男女計)の割合は、普通科が73.13%、農業科+水産科が2.79%、工業科+情報科が7.65%、商業科が6.00%、家庭科+看護科+福祉科が1.95%、総合科+その他が8.47%である。

学科の構成割合と比較して、普通科以外の学科からのデータの割合が多くなっていること、中学生と比べてサンプルサイズが大きいことなどを考慮し、分析の対象とするデータについては第3版作成時の規準集団とほぼ同様の学年構成比、男女別構成比、学科別の構成比を反映させてデータの抽出を行うこととした¹⁰。

具体的には、高校生3学年計347,362名について、職業レディネス・テスト第3版に掲載されている標準化の規準集団の学科グループの人数構成比、学年構成比、男女の学科グループ構成比を参照し、年度ごとに、1、2年生は各400名程度、3年生は200名程度、男女各1,000名程度、男女の学科グループ構成比は図表23とほぼ同じ割合になるように、各年度2,000名程度のデータをランダムサンプリングした。このようにして抽出したデータについて学年と男女別に集計した結果を図表24に、年度別の学年および男女別の集計を図表25に、男女・学科グループコード別の集計結果を図表26に示す。

図表24 高校生のサンプリングデータの学年と男女別内訳

学年/性別	男子	女子	計
1年	4,404 (20.26)	4,400 (20.25)	8,804 (40.51)
2年	4,402 (20.25)	4,400 (20.25)	8,802 (40.50)
3年	2,101 (9.67)	2,026 (9.32)	4,127 (18.99)
計	10,907 (50.19)	10,826 (49.81)	21,733 (100.00)

図表25 高校生のサンプリングデータの各年度の学年別男女別データ数

学年/男女別 年度 人数	1年			2年			3年			合計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
2007 人	401	400	801	400	400	800	194	191	385	995	991	1986
%	(50.06)	(49.94)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.39)	(49.61)	(100)	(50.10)	(49.90)	(100)
2008 人	402	400	802	401	400	801	191	192	383	994	992	1986
%	(50.12)	(49.88)	(100)	(50.06)	(49.94)	(100)	(49.87)	(50.13)	(100)	(50.05)	(49.95)	(100)
2009 人	401	400	801	401	400	801	186	192	378	988	992	1980
%	(50.06)	(49.94)	(100)	(50.06)	(49.94)	(100)	(49.21)	(50.79)	(100)	(49.90)	(50.10)	(100)
2010 人	400	400	800	400	400	800	190	192	382	990	992	1982
%	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(49.74)	(50.26)	(100)	(49.95)	(50.05)	(100)
2011 人	400	400	800	400	400	800	198	192	390	998	992	1990
%	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.77)	(49.23)	(100)	(50.15)	(49.85)	(100)
2012 人	400	400	800	400	400	800	190	185	375	990	985	1975
%	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.67)	(49.33)	(100)	(50.13)	(49.87)	(100)
2013 人	400	400	800	400	400	800	190	174	364	990	974	1964
%	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(52.20)	(47.80)	(100)	(50.41)	(49.59)	(100)
2014 人	400	400	800	400	400	800	190	170	360	990	970	1960
%	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(52.78)	(47.22)	(100)	(50.51)	(49.49)	(100)
2015 人	400	400	800	400	400	800	192	179	371	992	979	1971
%	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(51.75)	(48.25)	(100)	(50.33)	(49.67)	(100)
2016 人	400	400	800	400	400	800	190	185	375	990	985	1975
%	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.67)	(49.33)	(100)	(50.13)	(49.87)	(100)
2017 人	400	400	800	400	400	800	190	174	364	990	974	1964
%	(50.00)	(50.00)	(100)	(50.00)	(50.00)	(100)	(52.20)	(47.80)	(100)	(50.41)	(49.59)	(100)
年度計 人	4404	4400	8804	4402	4400	8802	2101	2026	4127	10907	10826	21733
%	(50.02)	(49.98)	(100)	(50.01)	(49.99)	(100)	(50.91)	(49.09)	(100)	(50.19)	(49.81)	(100)

¹⁰ 地域の変数については各年度のばらつきが大きいためサンプリングの規準に含めていない。また、学科グループコード⑦が付与されたデータは予め対象からはずした。

図表 26 高校生のサンプリングデータの男女別、学科別内訳

		①普通	②農業+水産	③工業+情報	④商業	⑤家庭+看護+福祉	⑥その他+総合	全体計
全体	人	15,510	831	2,411	1,310	920	751	21,733
	%	71.37	3.82	11.09	6.03	4.23	3.46	100
男子	人	7,700	463	2,090	327	8	319	10,907
	%	70.60 (35.43)	4.24 (2.13)	19.16 (9.62)	3.00 (1.50)	0.07 (0.04)	2.92 (1.47)	50.19
女子	人	7,810	368	321	983	912	432	10,826
	%	72.14 (35.94)	3.4 (1.69)	2.97 (1.48)	9.08 (4.52)	8.42 (4.20)	3.99 (1.99)	49.81

※男女別の欄の割合は、男子計、女子計それぞれに占める各学科生徒数の割合。()内の数字は、全体計の人数に占める、男女別各学科人数の割合。

このサンプリングデータは、2007年度から2017年度の11年度分のデータから構成されるため、男子は10,907名、女子は10,826名、合計21,733名となり、1年生と2年生が約40%、3年生が20%を占める¹¹。また、学科グループコードでみると、①普通科は71.37%、②農業+水産は3.82%、③工業+情報は11.09%、④商業は6.03%、⑤家庭+看護+福祉は4.23%、⑥その他+総合は3.46%の割合となった。

なお、学校所在地はサンプリングの際には特に考慮しなかったが、今回サンプリングされたデータについて職業レディネス・テスト第3版作成時に用いられた地域ブロック別に集計した結果を図表27に示す。

職業レディネス・テスト第3版の作成にあたっては、高等学校のデータは全国47校から集められている。地域ブロックに割り当てられた学校数の内訳は手引に掲載されている数値をみると、北海道・東北ブロック5校(11%)、関東15校(32%)、東海・中部・北陸11校(23%)、近畿8校(17%)、中国・四国3校(6%)、九州・沖縄5校(11%)である。上記は1～3学年1クラスを1単位とする学校数であり生徒数ではないため、図表26に示した生徒数の割合とは厳密には比較できないが、データが含まれる地域ブロックの割合としてみると、今回の高校のサンプリングデータに関しては、関東(東京以外)と東京を合わせた関東の学校の生徒数の割合が多くなっている。ただ、全体としてサンプルサイズが大きいことと、職業レディネス・テスト第3版作成時の標準化データと比べ、特定のブロックにおいて極端にサンプルが少ないといった偏りは見られなかったため、今回の尺度の信頼性・妥当性の検証のための分析では地域ブロックによるデータ構成比の違いは特に影響しないと考えた。

¹¹ 職業レディネス・テスト第3版の標準化データでは、1年生と2年生がそれぞれ約38%、3年生が23%であった。

図表 27 高校生の地域ブロック別にみた各年度、学年別のデータ数の内訳（件）

		2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	計	%
北海道・東北	1年	222	171	170	200	158	130	107	52	92	102	45	1449	
	2年	97	68	87	96	82	79	71	49	65	80	20	794	
	3年	32	56	128	60	60	115	125	100	52	27	80	835	
	計	351	295	385	356	300	324	303	201	209	209	145	3078	(14.16)
関東(東京除く)	1年	272	293	284	361	363	291	296	287	290	212	238	3187	
	2年	163	333	246	294	277	230	253	281	199	222	286	2784	
	3年	157	146	159	128	167	121	145	166	144	118	132	1583	
	計	592	772	689	783	807	642	694	734	633	552	656	7554	(34.76)
東京	1年	28	74	81	68	80	90	105	92	120	117	162	1017	
	2年	72	11	90	58	96	50	83	118	105	86	77	846	
	3年	30	51	15	19	31	0	27	32	0	2	18	225	
	計	130	136	186	145	207	140	215	242	225	205	257	2088	(9.61)
東海・中部・北陸	1年	150	125	110	73	85	133	135	189	167	151	188	1506	
	2年	166	141	166	123	140	228	160	161	149	162	223	1819	
	3年	27	70	31	53	30	65	21	0	65	94	38	494	
	計	343	336	307	249	255	426	316	350	381	407	449	3819	(17.57)
近畿	1年	29	15	48	5	30	56	57	62	34	23	35	394	
	2年	92	63	8	11	22	47	55	68	138	73	37	614	
	3年	14	41	30	30	53	6	10	5	6	11	92	298	
	計	135	119	86	46	105	109	122	135	178	107	164	1306	(6.01)
中国・四国	1年	75	68	46	50	28	24	27	40	44	32	23	457	
	2年	76	68	90	95	71	65	52	51	71	47	32	718	
	3年	92	5	8	74	2	42	0	0	0	104	0	327	
	計	243	141	144	219	101	131	79	91	115	183	55	1502	(6.91)
九州・沖縄	1年	25	56	62	43	56	76	73	78	53	163	109	794	
	2年	134	117	114	123	112	101	126	72	73	130	125	1227	
	3年	33	14	7	18	47	26	36	57	104	19	4	365	
	計	192	187	183	184	215	203	235	207	230	312	238	2386	(10.98)
地域合計	1年	801	802	801	800	800	800	800	800	800	800	800	8804	(40.51)
	2年	800	801	801	800	800	800	800	800	800	800	800	8802	(40.50)
	3年	385	383	378	382	390	375	364	360	371	375	364	4127	(18.99)
	計	1986	1986	1980	1982	1990	1975	1964	1960	1971	1975	1964	21733	(100.00)

(2) 各尺度の信頼性・妥当性の検証

①A 検査（職業興味）と C 検査（自信度）の尺度としての信頼性・妥当性

A 検査と C 検査の尺度としての信頼性・妥当性は、高校生に関しても中学生と同じ方法で検討した。用いたデータは 2007 年度から 2017 年度のサンプリングデータである。

職業レディネス・テストの通常の採点方法と同様に各項目に対する個人の回答を得点化し（やりたい、自信がある→2点、どちらともいえない→1点、やりたくない、自信がない→0点）、A 検査（職業興味）と C 検査（自信度）それぞれについて 54 項目を用いて因子分析を行った。主因子法の後、6 因子を指定して Promax 回転を行った。

【A 検査（職業興味）についての因子分析の結果】

職業興味因子分析の結果を図表 28 に示す。中学生の図表と同様に、項目内容の 1 列目の記号は、職業レディネス・テスト第 3 版での該当領域と項目番号である。

図表 28 高校生の「職業興味」を測定する 54 項目の因子分析結果
(Promax 回転後の因子負荷量)

項目内容	因子負荷量					
	F1	F2	F3	F4	F5	F6
A.51 雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	.732	-.016	.037	.016	.017	-.110
A.27 マンガをかいて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	.709	.101	.070	-.012	-.085	-.133
A_9 小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	.651	.137	-.093	-.002	-.041	-.045
A.21 テレビドラマや映画のシナリオを書く	.613	.103	-.045	-.066	-.023	.161
A.33 インターネットのホームページのデザインをする	.557	-.050	-.005	.298	-.029	.009
A.39 曲を作ったり、編曲したりする	.542	.020	.019	-.073	.015	.144
A.15 人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	.541	.015	.064	.023	.165	-.008
A.45 洋服やアクセサリーのデザインをする	.478	-.162	-.086	-.074	.181	.200
A_3 家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	.460	-.117	.064	-.025	.130	.137
E.17 客を集めるため、広告や催し物などを企画する	.308	-.005	-.053	.107	.160	.296
E.29 世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	.258	.205	.008	.075	.051	.219
I.32 病原体を発見するための実験や研究をする	-.063	.789	-.092	-.003	.061	.023
I.50 大学や研究所で、科学の研究をする	-.001	.753	-.063	.050	-.102	.065
I.38 新しい薬を開発する	-.033	.693	-.063	-.018	.045	.133
I.20 海水の成分や海流について調査研究する	-.011	.660	.077	.022	.013	-.029
I.26 新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	.044	.646	.000	.063	-.135	.124
I_8 環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	.003	.579	.082	.055	.090	-.072
I.14 農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	.005	.540	.137	.021	.056	-.039
I.44 博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	.172	.535	.053	-.012	.041	-.061
I_2 古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	.126	.517	.221	-.090	-.031	-.074
R.25 工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	-.035	-.077	.815	.006	.011	.005
R.31 トラックを運転して貨物運ぶ	-.037	-.124	.751	.053	.052	.007
R.37 自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	-.052	.034	.740	.035	-.104	.042
R.13 木材を加工し、組み立てて、家を作る	.055	-.024	.725	-.033	-.032	.049
R_1 部品を組み立てて機械を作る	.072	.069	.618	.160	-.186	-.056
R.43 飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	-.047	.135	.570	.042	.049	.076
R.49 船に乗って、魚や貝などの漁をする	.001	.117	.557	-.111	.118	.029
R.19 火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	-.028	.102	.508	-.109	.238	.066
R_7 火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	.086	.142	.488	-.038	.068	.045
C.36 ワードプロやパソコンを使って、書類などを清書する	.167	-.030	-.015	.785	-.056	-.144
C_6 文字や数字を、コンピュータに入力する	.145	-.059	.027	.739	-.099	-.137
C.18 文字や数字を、書類に正確に記入する	-.009	.000	-.063	.724	.074	-.082
C.12 帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	-.110	-.002	.014	.696	.052	.014
C.42 コンピュータを使って、複雑な計算をする	-.008	.159	.044	.621	-.178	-.009
C.54 従業員の毎月の給料を計算する	-.140	.018	.043	.613	.046	.167
C.48 会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	-.009	-.016	-.025	.516	.177	.132
C.30 依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	-.008	.104	-.056	.494	.143	.063
C.24 銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	-.114	.011	.080	.460	.152	.201
S.28 患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	-.063	.140	.000	.031	.776	-.176
S.34 家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	.038	.026	.076	-.020	.729	-.217
S.40 病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	-.106	.291	-.031	-.006	.672	-.086
S.46 悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	.149	.031	-.017	-.006	.589	-.013
S_4 保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	.064	-.154	.010	-.083	.572	-.033
S.52 飛行機の中で、乗客にサービスをする	.042	-.065	.008	.072	.522	.203
S.22 ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	.015	-.135	-.040	.181	.488	.213
S.16 ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	.048	-.044	-.013	.055	.477	.187
S.10 客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	.073	-.015	.095	.012	.430	.044
E.41 社長として、会社の経営の仕事にあたる	-.075	.081	.083	-.001	-.138	.713
E.47 店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	-.013	.013	.066	.081	-.013	.670
E_5 自分の店を経営する	.079	-.068	.040	-.093	-.052	.582
E.23 新しい組織を作ってリーダーになる	.080	.103	.090	-.080	-.086	.561
E.53 流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	.136	-.011	-.010	.116	.056	.521
E.11 テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	.354	.009	-.040	-.031	.007	.409
E.35 ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	.298	.038	-.044	-.055	.093	.362

因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1	1					
F2	.283	1				
F3	.082	.449	1			
F4	.232	.334	.199	1		
F5	.290	.215	.064	.266	1	
F6	.405	.250	.292	.326	.424	1

まず、第1因子(F1)には、芸術的領域(A)の9項目がまとまった。加えて企業的領域(E)のNo.17とNo.29の項目の負荷が高くなった。No.17は中学生においても芸術的領域(A)に負荷の高かった項目で、「客を集めるため、広告や催し物などを企画する」という項目である。また、No.29は「世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く」という新聞記者の職務を記述した項目であった。この2つの項目は、企業的領域(E)を測定する項目が集まる第6因子(F6)への負荷も高いが、第1因子の負荷量の方が若干高いため、第1因子に分類されている。

第2因子(F2)には研究的領域(I)を測定する9項目が集まり、第3因子(F3)は現実的領域(R)の9項目、第4因子(F4)は慣習的領域(C)の9項目、第5因子(F5)は社会的領域(S)の9項目でそれぞれ構成された。第2因子から第5因子までは第3版の構成通りの因子構造であることが確認された。

他方、最後の第6因子は、企業的領域(E)を測定する項目で構成されているが、9項目のうち2項目が第1因子の芸術的領域(A)に関する項目群との関連の方が若干強く第1因子に組み込まれたため、第6因子には7項目だけがまとまっている。因子間相関をみても、F1:芸術的領域(A)とF6:企業的領域(E)の相関は.405で、F2:研究的領域(I)とF3:現実的領域(R)との相関.449、F5:社会的領域(S)とF6:企業的領域(E)との相関.424に次いで、.40を超える正の相関がみられたことから、芸術的領域(A)と企業的領域(E)への興味は関連も高く、測定上もこの2つの興味領域を区別する項目の難しさが示唆されている。

以上のことから、高校生のサンプリングデータを用いた職業興味尺度の構造の検討については、6領域中4領域において尺度の構造は保たれているが、領域間の特性として関連性の高い芸術的領域(A)と企業的領域(E)の2領域については、54項目中2項目への回答がやや不安定であるとみることができる。

【C検査(自信度)についての因子分析の結果】

続いて、C検査(自信度)に含まれる54項目の因子分析の結果を図表29に示す。第1因子(F1)は研究的(I)、第2因子(F2)は現実的(R)、第3因子(F3)は芸術的(A)、第4因子(F4)は慣習的(C)、第5因子(F5)は社会的(S)、第6因子(F6)は企業的(E)の各9項目がそれぞれ高い負荷量を示し、第3版と同一の尺度の構成が確認された。A検査(職業興味)に関して、芸術的領域(A)の方に負荷量が高かったNo.17およびNo.29についても、C検査(自信度)に関しては企業的領域(E)にまとまること示された。特定の項目が職業興味では本来と異なる領域に分類されても自信度では第3版と同一の構造になるという結果は中学生のデータの結果と同じであった。

図表 29 高校生の「職務遂行の自信度」を測定する 54 項目の因子分析結果
(Promax 回転後の因子負荷量)

項目内容	因子負荷量					
	F1	F2	F3	F4	F5	F6
I.32 病原体を発見するための実験や研究をする	.784	-.067	-.043	-.012	.021	.030
I.50 大学や研究所で、科学の研究をする	.729	-.025	.009	.065	-.075	.032
I.20 海水の成分や海流について調査研究する	.723	.060	-.021	.018	.015	-.044
I.38 新しい薬を開発する	.669	-.026	-.025	-.035	-.002	.123
I. 8 環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	.659	.031	-.030	.064	.062	-.055
I.26 新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	.628	-.002	.047	.061	-.113	.121
I.14 農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	.620	.100	-.007	.005	.047	-.037
I.44 博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	.561	.028	.161	.007	.051	-.070
I. 2 古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	.545	.183	.098	-.064	-.014	-.081
R.25 工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	-.071	.814	-.037	.011	-.008	.023
R.37 自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	.037	.762	-.019	.031	-.096	.030
R.31 トラックを運転して貨物を運ぶ	-.093	.756	-.034	.050	.058	.018
R.13 木材を加工し、組み立てて、家を建てる	-.022	.746	.070	-.023	-.048	.023
R. 1 部品を組み立てて機械を作る	.026	.631	.092	.169	-.175	-.054
R.43 飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	.129	.597	-.027	.039	.056	.044
R.49 船に乗って、魚や貝などの漁をする	.121	.564	.001	-.104	.140	-.008
R.19 火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	.093	.500	-.044	-.142	.206	.098
R. 7 火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	.146	.493	.037	-.032	.054	.057
A.51 雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	-.002	.042	.752	.022	.015	-.153
A.27 マンガをかいて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	.117	.050	.681	-.030	-.088	-.097
A.33 インターネットのホームページのデザインをする	-.070	.018	.610	.270	-.003	-.037
A. 9 小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	.150	-.115	.599	-.017	-.064	.037
A.45 洋服やアクセサリーのデザインをする	-.147	-.008	.583	-.075	.162	.098
A.21 テレビドラマや映画のシナリオを書く	.113	-.062	.567	-.071	-.052	.214
A. 3 家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	-.123	.099	.557	-.037	.098	.079
A.15 人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	.034	.041	.555	.040	.165	-.041
A.39 曲を作ったり、編曲したりする	.031	.032	.514	-.085	.009	.154
C.36 ワードプロやパソコンを使って、書類などを清書する	-.021	-.019	.161	.779	-.068	-.127
C. 6 文字や数字を、コンピュータに入力する	-.054	.000	.115	.763	-.099	-.134
C.18 文字や数字を、書類に正確に記入する	-.004	-.046	.005	.758	.031	-.072
C.12 帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	.021	.008	-.125	.741	.026	.015
C.54 従業員の毎月の給料を計算する	.016	.053	-.136	.650	.050	.142
C.42 コンピュータを使って、複雑な計算をする	.129	.066	.014	.623	-.158	.009
C.24 銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	.011	.080	-.110	.537	.150	.131
C.48 会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	-.016	-.043	-.022	.505	.212	.133
C.30 依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	.100	-.059	-.010	.497	.163	.087
S.28 患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	.142	-.001	-.059	.026	.763	-.168
S.34 家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	.034	.041	.032	-.047	.741	-.186
S.40 病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	.294	-.035	-.094	-.004	.608	-.051
S.46 悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	.019	-.027	.119	-.039	.606	.005
S.52 飛行機の中で、乗客にサービスをする	-.071	.037	.049	.081	.592	.124
S. 4 保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	-.143	.015	.047	-.094	.576	-.035
S.22 ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	-.122	-.028	.003	.167	.574	.148
S.16 ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	-.053	-.028	.033	.060	.570	.155
S.10 客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	.002	.100	.070	-.005	.472	.017
E.41 社長として、会社の経営の仕事にあたる	.045	.087	-.074	-.004	-.113	.747
E.47 店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	-.006	.050	.005	.079	.006	.674
E. 5 自分の店を経営する	-.061	.057	.005	-.061	-.055	.660
E.23 新しい組織を作ったりリーダーになる	.043	.092	.041	-.063	-.056	.618
E.53 流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	-.026	-.005	.156	.092	.074	.509
E.11 テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	.029	-.070	.322	-.034	-.009	.465
E.35 ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	.022	-.057	.263	-.033	.091	.402
E.17 客を集めるため、広告や催し物などを企画する	-.008	-.058	.286	.089	.181	.331
E.29 世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	.213	-.030	.210	.100	.045	.256

因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1	1					
F2	.416	1				
F3	.271	.097	1			
F4	.344	.217	.212	1		
F5	.246	.127	.319	.296	1	
F6	.311	.336	.438	.341	.460	1

【A 検査（職業興味）、C 検査（自信度）の信頼性係数の算出】

各領域の測定のために用いられる検査項目を用いて、各領域の測定に関する信頼性係数（クロンバックの α 係数）の算出を行った。結果を図表 30 に示す。表には第3版作成時の中学生、高校生のデータ全体による各尺度の信頼性係数を載せているが、今回の高校生のサンプリングデータによっても A 検査、C 検査ともに第3版とほぼ同程度の値が得られた。因子分析の結果では職業興味（A 検査）の企業的領域（E）の2項目で芸術的領域（A）への負荷量が高かったが、企業的領域（E）の尺度全体としての信頼性係数は第3版作成時と同じく.83 となり、高い値が得られた。

図表 30 第3版の尺度構成に基づいた A 検査、C 検査の信頼性係数（高校生）

下位検査/領域・志向性	クロンバックの α 係数	第3版作成時の α 係数(参考)	下位検査/領域・志向性	クロンバックの α 係数	第3版作成時の α 係数(参考)
A検査	R領域	.88	C検査	R領域	.90
	I領域	.88		I領域	.91
	A領域	.85		A領域	.85
	S領域	.84		S領域	.85
	E領域	.83		E領域	.86
	C領域	.87		C領域	.89

※第3版作成時のクロンバックの α 係数は中学、高校込みの28,070名で算出している。

※上記は2007-2017年度のデータ(n=21,733)で算出したが、2013-2016年度の直近のデータ(n=7,870)で算出した場合でも α 係数はC検査、C領域が.89に変わったほかはすべて上記と同値となった。

②B 検査（基礎的志向性）の尺度としての信頼性・妥当性

基礎的志向性の 64 項目について信頼性・妥当性の検証を行った。採点は職業レディネス・テストに準じて、「あてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として得点化し因子分析を行った。主因子法の後、3因子を指定して Promax 回転を行った。

【B 検査（基礎的志向性）についての因子分析の結果】

因子分析の結果を図表 31 に示す。図表 31 では、各項目の職務内容の記述の前に、第3版で用いられている DPT の志向性と項目番号が記載されている。第1因子（F1）には対人志向（P 志向）、第2因子（F2）には対情報志向（D）、第3因子（F3）には対物志向（T）の項目が多く集まっている。中学生では、職業レディネス・テスト第3版の構成と異なる項目は見られなかったが、高校生のデータでは、T_30「自然公園やアスレチックに行くのが好きだ」という項目が対物志向（T）とともに対人志向（P）への高い負荷量を示し、F1にまとまった。それ以外については、第3版と同じ構造が得られた。

図表 31 高校生の B 検査 (64 項目) の因子分析結果 (Promax 回転後の因子負荷量)

項目内容	因子負荷量		
	F1	F2	F3
P_61 人とすぐに仲良くなる	.618	-.016	-.036
P_50 人からよく元気な人だと思われる	.599	-.100	-.018
P_26 新しい友だちをつくるのが得意だ	.596	-.012	-.057
P_42 自分から人に話しかけることが多い	.579	-.001	-.075
P_18 場の雰囲気盛り上げるのが得意だ	.531	.041	-.067
P_37 人と話すのは楽しい	.521	-.010	.017
P_21 グループで作業するような授業は楽しい	.505	-.128	.136
P_45 友だちとおしゃべりやメールのやりとりが好きだ	.501	-.072	.007
P_64 いろいろな人と関わられるような仕事をしたい	.486	.170	-.013
P_5 グループで行動するのが好きだ	.477	-.142	.041
P_13 友だちは多いほど楽しい	.468	-.168	.032
P_2 話し合いの場ではよく発言する方だ	.463	.141	-.108
P_10 人前で発言するのが得意だ	.410	.163	-.137
P_16 人が喜んでいるのを見ると自分もうれしくなる	.409	.056	.095
P_32 困っている人を見るとつい声をかけたくなる	.400	.143	.075
P_34 人より目立つことが好きだ	.382	.110	-.081
P_53 休みの日に家で一人で過ごすのはつまらない	.381	-.159	.015
P_8 友だちや家族の役に立つとうれしい	.374	.073	.077
P_29 たくさんの人数で遊べるゲームが好きだ	.373	-.091	.156
P_56 他の人の世話をするのが好きだ	.369	.103	.073
P_40 人に感謝されとうれしい	.367	.073	.080
P_48 世の中の役に立つことをしたい	.312	.211	.111
T_30 自然公園やアスレチックに行くのが好きだ	.304	-.018	.303
P_58 劇をやるなら舞台にあがって演技をしたい	.281	.157	-.027
P_24 立場の弱い人には親切にすべきだと思う	.211	.086	.096
D_55 必要な情報はいつもきちんと整理しておきたい	-.008	.540	.020
D_9 情報を集めるのが好きだ	.024	.514	-.040
D_49 何かを説明するときにはわかりやすく情報を整理する	.041	.503	-.019
D_1 短い間にたくさんの情報を集めることが得意だ	.045	.465	-.075
D_28 世の中で起きている事件や出来事に關心がある	.067	.455	.043
D_44 わからないことがあるとインターネットや本で調べる	-.090	.452	.061
D_15 何かを始めるときは計画を立ててから取り組む	.038	.432	-.041
D_52 外国の人の意見や考え方について知りたい	.072	.412	.078
D_7 計画的に物事を進めるタイプだ	.032	.409	-.076
D_36 税金や制度など社会の仕組みについてよく理解したい	-.054	.401	.034
D_47 何か失敗したらまずその原因を考える	.065	.397	.062
D_33 将来はいろいろな情報を集める仕事をしたい	-.009	.397	-.052
D_23 慎重な性格だと思う	-.185	.369	.051
D_41 何かを調べたりまとめるような授業は楽しい	.100	.362	.102
D_20 テレビではニュースや報道番組をよく見る	.006	.359	.047
D_63 落ち着いていると言われる	-.239	.336	.064
D_17 流行に関する情報は雑誌やインターネットでチェックする	.134	.324	-.117
D_57 新聞や雑誌にはよく目を通す	.099	.316	-.059
D_60 遠い国の人々の暮らしに興味がある	.101	.303	.164
D_12 図書館や本屋によくでかける	-.186	.282	.112
D_25 パソコンを使うのが得意だ	-.055	.281	.002
D_4 本を読むのが好きだ	-.171	.265	.131
D_31 いったん始めたことは忍耐強くやりとげる方だ	.125	.248	.087
D_39 自分の持ち物や道具の手入れはきちんとしている	.066	.244	.105
T_11 工作や物作りが好きだ	-.062	-.064	.687
T_3 指先を使って物を組み立てるのが得意だ	-.056	.005	.575
T_43 机や本棚を自分で作ってみたい	-.012	-.020	.562
T_51 美術や図工の時間は楽しい	.017	-.021	.538
T_27 物を作り出すような仕事をしたい	-.077	.051	.504
T_19 手先が器用だと思う	-.003	.027	.437
T_35 大工道具やドライバーなどの道具類はうまく使える	.016	.003	.428
T_6 自分で野菜や果物を栽培したい	.054	.015	.422
T_22 牧場や農場で働いてみたい	.024	-.046	.402
T_59 こわれた物があると何とか直せないか試してみる	.056	.113	.387
T_38 星や動植物をじっくり観察するのが好きだ	.014	.129	.374
T_14 動物の飼育や植物の世話が好きだ	.151	-.039	.374
T_62 博物館や科学館に行くのが好きだ	-.066	.191	.332
T_46 山や海に出かけるのが好きだ	.293	-.036	.327
T_54 外国に旅行するなら自然の豊かな国がいい	.115	.043	.266

因子間相関	F1	F2	F3
F1	1		
F2	.185	1	
F3	.110	.332	1

【B 検査（基礎的志向性）の信頼性係数の算出】

職業レディネス・テスト第3版の各志向性で用いられている項目をまとめて、3つの志向性ごとに信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出した結果を図表32に示す。今回のデータを用いても、職業レディネス・テスト作成時とほぼ同じ水準の値が得られ、尺度としての信頼性は保たれていることが確認された。

図表 32 第3版の尺度構成に基づいたB検査の尺度の信頼性係数(高校生)

下位検査/領域・志向性		クロンバックの α 係数	第3版作成時の α 係数 (参考)
B検査	D志向	.81	.81
	P志向	.86	.85
	T志向	.80	.80

※第3版作成時のクロンバックの α 係数は中学、高校込みの28,070名で算出している。
 ※上記は2007-2017年度のデータ(n=21,733)で算出したが、2013-2016年度の直近のデータ(n=7,870)で算出した場合でも α 係数はすべて上記と同値となった。

(3) 下位尺度の規準得点の妥当性に関する検証

男女別に各下位尺度得点の平均値と経年変化を検討した。この分析には尺度の構造の検討を行う際に作成した2007年度から2017年度までのサンプリングデータを用いた。ただし、2017年度は2017年4月から7月までの短期間のデータで構成されており、もともとのデータ数が少ないところからのサンプリングとなっている。

①男女別の各下位尺度得点の平均値と標準偏差

男女別の下位尺度別の粗点の合計点の平均値（mean）と標準偏差（SD）を図表33に示す。参考として第3版作成時の規準集団の高校生の平均値と標準偏差も記載した。

図表 33 高校生男女別の各下位尺度得点の平均値(mean)と標準偏差(SD)

下位検査/領域		男子(高校生)				女子(高校生)			
		今回データ(n=10907)		第3版作成時(n=8409)		今回データ(n=10826)		第3版作成時(n=8695)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	8.14	(4.94)	8.08	(4.98)	2.95	(3.68)	2.96	(3.66)
	I領域	4.80	(4.57)	5.37	(4.78)	2.83	(3.93)	3.06	(4.04)
	A領域	5.72	(4.53)	5.62	(4.44)	7.50	(4.96)	7.20	(4.78)
	S領域	5.00	(4.23)	4.98	(4.14)	7.64	(4.70)	8.16	(4.59)
	E領域	5.84	(4.42)	6.21	(4.47)	5.30	(4.33)	5.75	(4.27)
	C領域	4.77	(4.37)	4.79	(4.33)	4.86	(4.61)	5.48	(4.67)
B検査	D志向	10.38	(5.13)	10.53	(5.13)	10.39	(4.76)	10.54	(4.80)
	P志向	13.74	(5.31)	13.42	(5.23)	14.69	(4.79)	15.25	(4.69)
	T志向	7.66	(3.95)	7.54	(3.96)	7.16	(3.73)	6.93	(3.78)
C検査	R領域	7.79	(5.12)	8.12	(5.05)	2.73	(3.56)	2.95	(3.63)
	I領域	4.06	(4.41)	4.95	(4.70)	2.35	(3.61)	2.64	(3.70)
	A領域	4.87	(4.41)	4.62	(4.12)	6.28	(4.74)	5.38	(4.36)
	S領域	5.43	(4.60)	5.55	(4.40)	7.76	(4.88)	8.07	(4.64)
	E領域	4.85	(4.40)	5.15	(4.42)	4.15	(4.07)	4.36	(4.00)
	C領域	5.18	(4.84)	5.69	(4.88)	5.09	(4.87)	6.17	(4.87)

また、A 検査と C 検査の各領域について、男女別に、今回のデータと第3版作成時の高校生の規準集団の平均値をグラフにしたものが図表 34 である。

図表 34 高校生男女別の A 検査と C 検査の各下位尺度得点の平均値



各グラフの値をみると、今回の各下位尺度の平均値は、第3版作成時の規準集団の平均値と傾向は大きく変わっていない。ただ、男女別に細かくみると、男子の場合、A 検査（職業興味）と C 検査（自信度）の研究的領域（I）において、今回のデータの平均値が第3版作成時よりも低かった（A 検査で.57、C 検査で.89 の差）。また、C 検査の慣習的領域（C）で、今回の方が少し低めである（.51 の差）。それ以外では特に大きな差はない。

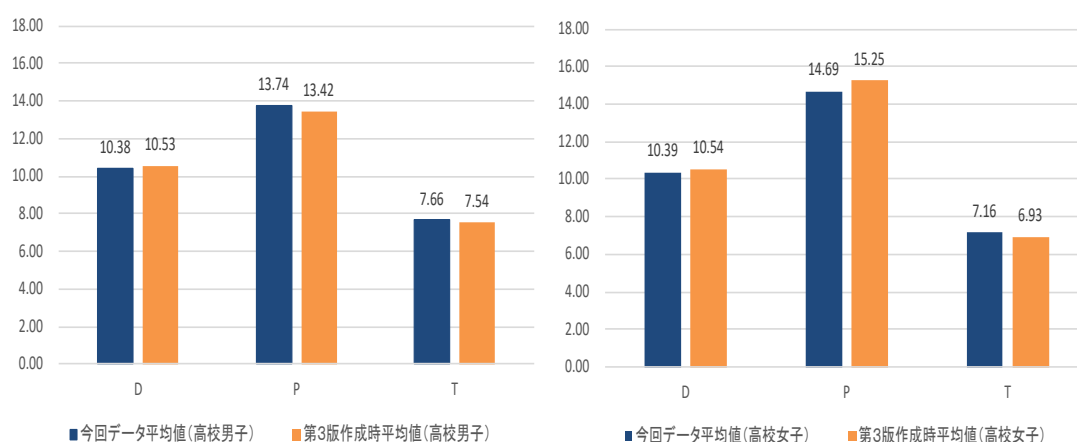
女子の A 検査（職業興味）では、社会的（S）、企業的（E）、慣習的領域（C）で今回よりも第3版作成時データの数値が高めだった（Sでは.52、Eでは.45、Cでは.62の差）。また、芸術的領域（A）では今回のデータの方が高めだった（.30の差）。C検査（自信度）では、慣習的領域（C）に関して今回のデータは第3版作成時のデータの平均値より低かった（1.08の差）。また、芸術的領域（A）については今回のデータの方が高かった（0.9の差）。芸術的領域（A）では、興味も自信も今回のデータの方が高めであり、慣習的領域（C）については、今回のデータの方が興味も自信も低めである。

検査ごとに6領域を得点の高い順にみていくと、男子の A 検査（職業興味）の場合、今回のデータでは REASIC の順であったが、第3版作成時では REAISC であった。4位と5位の順位が入れ替わり、今回は研究的領域（I）が社会的領域（S）より下になっているがそれ以外は同じであった。C検査（自信度）の場合、今回のデータでは RSCAEI の順であったが、第3版では RCSEIA であり、第1位の現実的領域（R）は同じであったが、それ以外の順位は入れ替わっていた。2位と3位が入れ替わり、4位から6位も入れ替わっていた。ただ、男子の場合には、R以外の領域では各領域の平均値がほぼ同じで、差が小さいため順位が入れ替わりやすいことはあるだろう。

女子では、A検査（職業興味）では今回のデータで SAECRI、第3版作成時のデータで SAECIR となり、5位と6位が入れ替わっていた。ただ平均値そのものは R も I も今回と第3版作成時で大きく違ってはいない。C検査（自信度）では、今回は SACERI、第3版作成時では SCAERI であり、2位と3位が入れ替わっていた。今回のデータでは A が高く C が低めとなったので、このような順位の入替わりが起こったといえる。

次に、図表 35 での B 検査の平均値を男女別にみる。男子では3つの志向性の平均値に関して、今回のデータと第3版作成時のデータ間で大きな違いはみられなかった。

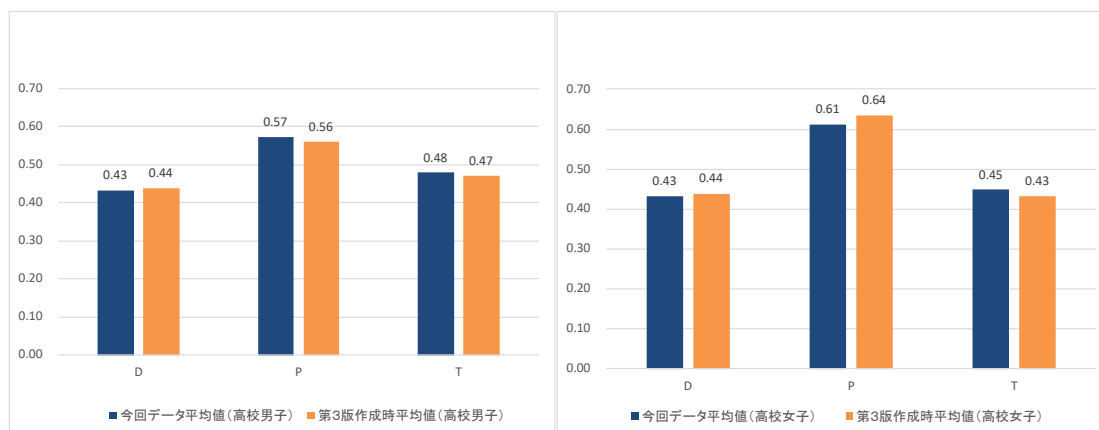
図表 35 高校生男女別の B 検査の各下位尺度得点の平均値



女子については、対人志向（P）に関して今回のデータの方が、第3版作成時よりも.56低くなっていた。また、対物志向（T）については今回の方が高かったが、差は.23でそれほど大きな違いではない。

なお、3つの志向性間での得点傾向を比較するために、各志向性の粗点の合計得点を各志向性の項目数で除した値の平均値を算出し、グラフにした（図表 36）。

図表 36 高校生男女別の B 検査の各下位尺度得点（項目数で除したもの）の平均値



基礎的志向性では、男子では、今回のデータも第3版作成時も対人志向（P）が最も高く、対物志向（T）、対情報志向（D）という順である。数値に関しても大きな違いはない。女子では、今回も第3版作成時も対人志向（P）が最も高かった。ただ2位と3位の順位は、厳密にみると今回のデータでは対物志向（T）が.45、対情報志向（D）が.43であり、第3版作成時では対情報志向（D）が.44、対物志向（T）が.43でDとTの順位は入れ替わっているが、数値そのものはほぼ同じであり、変化したとはいえない。

②男女別の各下位尺度得点の平均値と標準偏差（経年比較）

次に、2007年度から2017年度の各年度において男女別に各下位尺度の得点の平均値（mean）と標準偏差（SD）を算出した結果を図表 37 に示す。また、平均値の経年変化をみるため、検査ごとに各領域の平均値の男女別グラフを作成した（図表 38～図表 41）。

図表 37 高校生における男女別の各年度下位尺度の平均値 (mean) と標準偏差 (SD)

男子

下位検査／領域		2007(n=995)		2008(n=994)		2009(n=988)		2010(n=990)		2011(n=998)		2012(n=990)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	8.48	(4.91)	8.04	(4.96)	8.14	(4.82)	7.88	(4.92)	8.03	(4.82)	8.31	(4.92)
	I領域	4.96	(4.60)	4.88	(4.65)	5.12	(4.62)	4.66	(4.66)	4.50	(4.40)	4.97	(4.53)
	A領域	5.99	(4.56)	5.87	(4.51)	5.82	(4.38)	5.66	(4.57)	5.50	(4.50)	6.03	(4.50)
	S領域	4.96	(4.26)	4.73	(4.10)	5.08	(4.15)	4.77	(4.09)	5.04	(4.27)	5.29	(4.23)
	E領域	5.96	(4.41)	5.88	(4.34)	5.91	(4.25)	5.78	(4.37)	5.75	(4.35)	6.23	(4.48)
	C領域	4.47	(4.11)	4.36	(4.26)	4.96	(4.35)	4.62	(4.31)	4.65	(4.37)	5.11	(4.40)
B検査	D志向	10.35	(5.05)	10.00	(5.22)	10.25	(5.06)	10.21	(5.18)	9.93	(5.15)	10.74	(5.03)
	P志向	13.56	(5.38)	13.48	(5.20)	13.70	(5.17)	13.70	(5.24)	13.66	(5.12)	14.05	(5.12)
	T志向	7.77	(3.87)	7.41	(3.90)	7.50	(3.97)	7.33	(3.95)	7.39	(3.88)	7.75	(3.82)
C検査	R領域	8.12	(5.12)	7.72	(5.13)	7.71	(5.01)	7.60	(5.02)	7.79	(5.00)	7.93	(5.09)
	I領域	4.32	(4.50)	4.22	(4.41)	4.33	(4.46)	4.08	(4.57)	3.86	(4.28)	4.21	(4.36)
	A領域	5.09	(4.53)	4.93	(4.32)	4.91	(4.22)	4.88	(4.55)	4.75	(4.40)	5.03	(4.47)
	S領域	5.48	(4.60)	5.16	(4.42)	5.35	(4.47)	5.35	(4.51)	5.52	(4.56)	5.62	(4.65)
	E領域	4.99	(4.50)	4.90	(4.38)	4.93	(4.38)	4.81	(4.37)	4.71	(4.17)	5.01	(4.42)
	C領域	5.08	(4.73)	4.89	(4.69)	5.29	(4.64)	5.08	(4.79)	5.05	(4.78)	5.38	(4.81)

下位検査／領域		2013(n=990)		2014(n=990)		2015(n=992)		2016(n=990)		2017(n=990)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	8.21	(5.00)	8.34	(4.97)	8.22	(5.14)	8.31	(4.88)	7.56	(4.94)
	I領域	5.03	(4.70)	4.83	(4.62)	4.64	(4.40)	4.73	(4.59)	4.45	(4.45)
	A領域	6.04	(4.67)	5.89	(4.60)	5.57	(4.51)	5.48	(4.58)	5.05	(4.37)
	S領域	5.32	(4.19)	5.49	(4.43)	4.94	(4.29)	4.90	(4.27)	4.50	(4.12)
	E領域	6.00	(4.30)	6.14	(4.67)	5.97	(4.54)	5.62	(4.50)	5.03	(4.23)
	C領域	4.94	(4.30)	5.12	(4.58)	4.82	(4.45)	4.82	(4.49)	4.60	(4.37)
B検査	D志向	10.81	(5.25)	10.55	(5.09)	10.61	(5.15)	10.63	(5.17)	10.16	(5.07)
	P志向	13.87	(5.41)	14.01	(5.43)	13.84	(5.45)	13.92	(5.40)	13.39	(5.45)
	T志向	7.74	(4.11)	7.99	(4.02)	7.74	(4.00)	7.98	(3.87)	7.60	(4.03)
C検査	R領域	7.81	(5.18)	7.96	(5.25)	7.80	(5.41)	7.87	(5.08)	7.35	(5.07)
	I領域	4.27	(4.64)	3.93	(4.32)	3.83	(4.32)	3.93	(4.47)	3.70	(4.13)
	A領域	5.14	(4.57)	5.00	(4.50)	4.70	(4.33)	4.77	(4.38)	4.35	(4.19)
	S領域	5.75	(4.73)	5.76	(4.70)	5.38	(4.72)	5.37	(4.64)	4.99	(4.58)
	E領域	5.09	(4.39)	5.12	(4.67)	4.85	(4.46)	4.79	(4.51)	4.17	(4.11)
	C領域	5.48	(4.93)	5.35	(4.90)	5.04	(5.02)	5.28	(5.10)	5.03	(4.81)

女子

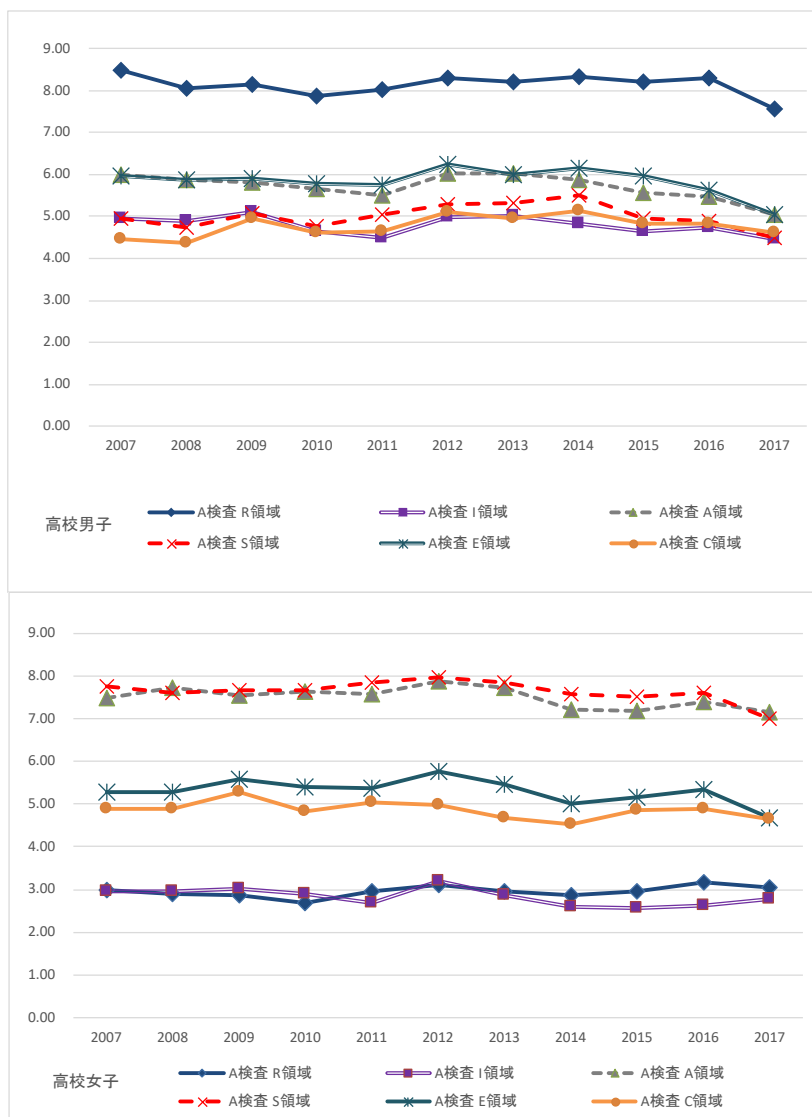
下位検査／領域		2007(n=991)		2008(n=992)		2009(n=992)		2010(n=992)		2011(n=992)		2012(n=985)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	2.99	(3.77)	2.89	(3.63)	2.88	(3.62)	2.70	(3.64)	2.94	(3.63)	3.09	(3.76)
	I領域	2.97	(4.17)	2.94	(3.89)	3.01	(4.05)	2.88	(3.87)	2.68	(3.82)	3.19	(4.14)
	A領域	7.49	(5.06)	7.71	(4.94)	7.54	(4.91)	7.62	(5.08)	7.58	(4.91)	7.89	(5.12)
	S領域	7.75	(4.63)	7.60	(4.71)	7.67	(4.66)	7.65	(4.68)	7.84	(4.67)	7.96	(4.85)
	E領域	5.28	(4.34)	5.28	(4.26)	5.59	(4.49)	5.41	(4.43)	5.37	(4.19)	5.75	(4.46)
	C領域	4.89	(4.55)	4.88	(4.49)	5.28	(4.72)	4.84	(4.60)	5.04	(4.63)	4.97	(4.59)
B検査	D志向	10.34	(4.81)	10.37	(4.79)	10.17	(4.86)	10.28	(4.90)	10.27	(4.77)	10.54	(4.81)
	P志向	14.96	(4.95)	14.78	(4.77)	14.82	(4.79)	14.65	(4.87)	14.82	(4.61)	14.81	(4.72)
	T志向	7.01	(3.72)	6.91	(3.61)	6.97	(3.71)	7.10	(3.86)	7.16	(3.68)	7.22	(3.56)
C検査	R領域	2.76	(3.64)	2.65	(3.47)	2.58	(3.48)	2.53	(3.41)	2.82	(3.61)	2.82	(3.75)
	I領域	2.41	(3.57)	2.43	(3.54)	2.56	(3.96)	2.30	(3.47)	2.29	(3.53)	2.65	(3.75)
	A領域	6.22	(4.65)	6.37	(4.69)	6.17	(4.76)	6.27	(4.90)	6.47	(4.76)	6.65	(4.91)
	S領域	7.84	(4.82)	7.63	(4.90)	7.63	(4.91)	7.58	(4.85)	7.86	(4.80)	8.16	(4.92)
	E領域	4.07	(4.07)	4.07	(3.98)	4.32	(4.28)	4.08	(4.20)	4.11	(3.95)	4.50	(4.09)
	C領域	5.21	(4.87)	5.27	(4.78)	5.24	(4.97)	5.10	(4.85)	5.10	(4.89)	5.25	(4.91)

下位検査／領域		2013(n=974)		2014(n=970)		2015(n=979)		2016(n=985)		2017(n=974)	
		mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A検査	R領域	2.97	(3.65)	2.88	(3.59)	2.95	(3.63)	3.16	(3.79)	3.04	(3.71)
	I領域	2.86	(3.93)	2.59	(3.78)	2.55	(3.67)	2.63	(3.79)	2.77	(4.02)
	A領域	7.74	(4.94)	7.21	(4.95)	7.19	(5.00)	7.40	(4.80)	7.14	(4.77)
	S領域	7.84	(4.70)	7.56	(4.53)	7.52	(4.72)	7.61	(4.81)	7.01	(4.65)
	E領域	5.45	(4.39)	4.99	(4.14)	5.16	(4.33)	5.35	(4.34)	4.69	(4.17)
	C領域	4.66	(4.55)	4.53	(4.43)	4.85	(4.79)	4.89	(4.63)	4.64	(4.70)
B検査	D志向	10.53	(4.84)	10.10	(4.55)	10.54	(4.65)	10.64	(4.68)	10.54	(4.66)
	P志向	14.77	(4.79)	14.41	(4.76)	14.36	(4.93)	14.67	(4.71)	14.52	(4.78)
	T志向	7.33	(3.74)	7.30	(3.78)	7.07	(3.65)	7.44	(3.91)	7.30	(3.76)
C検査	R領域	2.75	(3.66)	2.72	(3.42)	2.63	(3.47)	2.86	(3.54)	2.86	(3.67)
	I領域	2.47	(3.79)	2.17	(3.41)	2.09	(3.38)	2.24	(3.49)	2.28	(3.74)
	A領域	6.49	(4.78)	6.13	(4.70)	6.06	(4.82)	6.27	(4.61)	5.94	(4.52)
	S領域	7.99	(4.85)	7.76	(4.79)	7.64	(4.99)	7.76	(5.01)	7.49	(4.83)
	E領域	4.42	(4.17)	3.89	(3.86)	4.04	(4.10)	4.33	(4.01)	3.80	(4.00)
	C領域	5.15	(4.99)	4.74	(4.68)	4.98	(4.97)	5.13	(4.83)	4.78	(4.81)

【A 検査 (職業興味) の各領域の平均値の推移】

A 検査 (職業興味) の各年度の平均値の推移を図表 38 に示す。

図表 38 A 検査における高校生男女別にみた下位尺度得点平均値の経年変化



男子については、現実的領域 (R) が継続的に他の領域よりも高い平均値を示しており、その次に企業的 (E) と芸術的 (A) が同じレベルで推移し、その下に社会的 (S)、研究的 (I)、慣習的 (C) が同程度の値で推移している。各領域とも年度によって多少の増減はあるが、大きな変化はみられない。

女子については、社会的 (S) と芸術的 (A) がほぼ同じレベルで推移し、次が企業的 (E) と慣習的 (C)、その下に研究的 (I) と現実的 (R) がある。これについても年度により多少の増減はあるが、傾向としてはほぼ同じ水準で推移しており、一定の上昇や下降などの特徴的な変化はみられなかった。

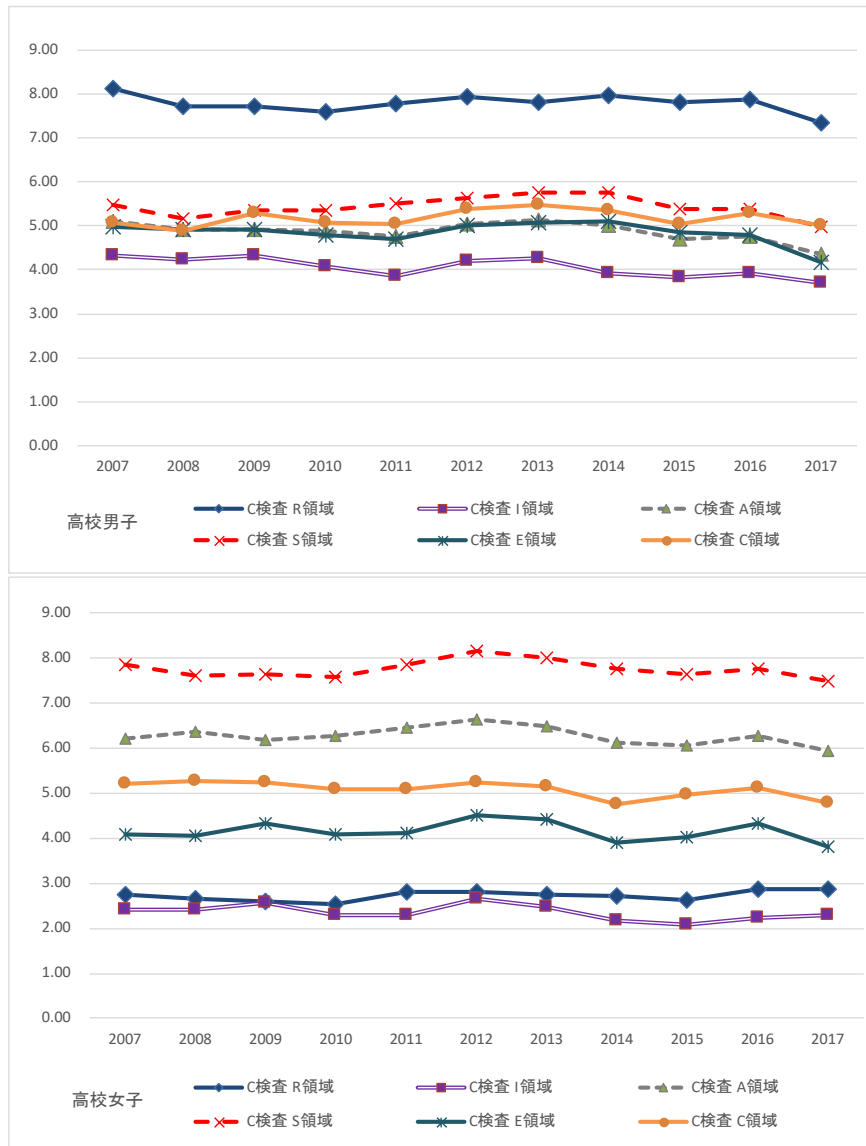
なお、図表 38 のグラフをみると、男女ともに複数の領域において 2017 年度の数値がそれ以前に比べて低くなっている。2017 年度は他の年度が 12 か月分のデータで構成されて

いるのに対して4月から7月までの年度前半の4か月分のデータしか含まれていないことによる条件の影響を受けている可能性が考えられる。

【C 検査（自信度）の各領域の平均値の推移】

C 検査（自信度）に関して、各領域の合計得点の平均値の推移を図表 39 に示す。

図表 39 C 検査における高校生男女別にみた下位尺度得点平均値の経年変化



男子については A 検査（職業興味）と同じ傾向で、現実的領域（R）が最も高い得点で推移している。それ以外の領域の平均値にはあまり差がないが、社会的（S）と慣習的（C）がその次で、企業的（E）と芸術的（A）がそれよりもやや低めの水準で推移している。研究的領域（I）は最も低く 4.0 前後となっている。

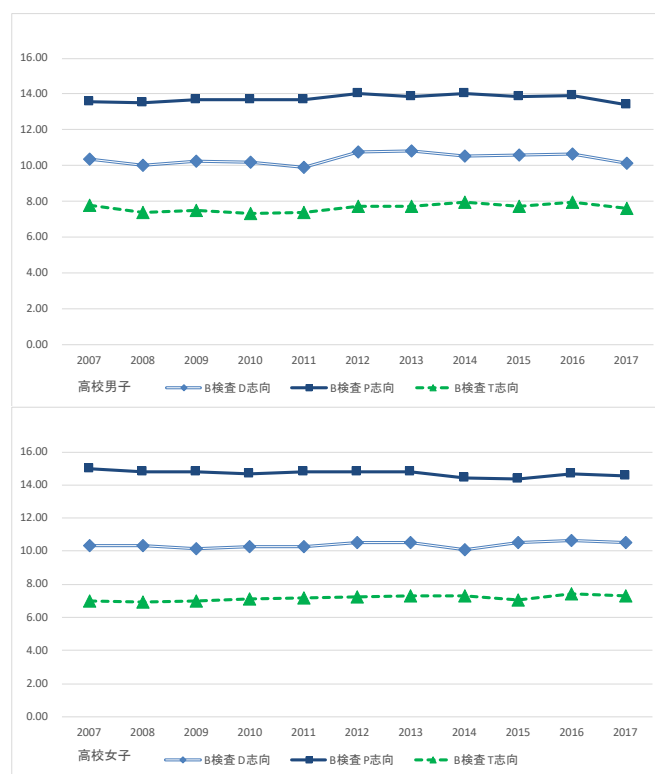
女子では男子よりも各領域の平均値の高低が分かれており、2007年度から2017年度を通して社会的（S）、芸術的（A）、慣習的（C）、企業的（E）、現実的（R）、研究的（I）領域の順となっている。5位と6位の現実的（R）と研究的（I）領域は他よりも低く、現実的（R）の方がやや高めであるものの、どちらも同程度の水準で推移している。

なお、C検査（自信度）の6領域の平均値においても、A検査（職業興味）と同様に、複数の領域において2017年度の平均値が2016年度以前よりやや低くなっている傾向がみられた。理由としては、A検査の結果に関して述べたように2017年度を構成するデータが4月～7月までの年度前半のものに限られているという要因の影響を受けているためと考えられる。

【B検査（基礎的志向性）の各領域の平均値の推移】

基礎的志向性の下位検査の合計得点の平均値の推移を図表40に示す。

図表40 B検査における高校生男女別にみた下位尺度得点平均値の経年変化



※注：T志向はD志向、P志向よりも項目数が少ないので、志向性間での水準の比較はできない。

B検査の平均値をみると、対物志向（T）の項目数が他よりも少ないので、合計点の平均値で相互の志向性間での高低の比較はできないが、長期的にみた場合、年度によって得点に多少の違いはあるものの、一定の変化の傾向は特にみられず、男女ともに各志向性は

同程度の水準で推移しているとみることができる。

(4) 高校生の結果のまとめ

高校生のデータの分析結果をまとめると、まず各検査の構造に関しては、A検査（職業興味）において、企業的領域（E）に該当する項目のうち2つの項目（No.17とNo.29）が企業的領域（E）の他に芸術的領域（A）に該当する項目とも高い関連性を示した。他方、C検査（自信度）では、すべての項目が第3版と同一の各領域の項目群にまとめられ、A検査（職業興味）で芸術的領域（A）に負荷の高かった項目もC検査（自信度）では企業的領域（E）に分けられた。次いで、各領域に含まれる項目を用いて信頼性係数を算出したところ、第3版作成時と同程度の高い値を示した。

各検査の各下位尺度の平均値については、B検査（基礎的志向性）では男女ともに今回のデータと第3版作成時のデータで大きな違いはなかった。他方、男子の研究的領域（I）において、A検査（職業興味）もC検査（自信度）でも今回のデータが低めとなった。女子では特にC検査（自信度）において、芸術的領域（A）と慣習的領域（C）で第3版作成時の得点との違いがあった。芸術的領域（A）は今回のデータの方が高く、慣習的領域（C）では今回のデータの平均値が低かった。ただ、経年的にみると2017年度の得点がどの領域でも若干低めとなっている傾向はみられたが、2007年度から11年間を通してみると、規則的な上昇や下降などの特徴的な変化の傾向はみられなかった。

5. 総合的考察

本稿では、職業レディネス・テスト第3版の改訂に関する研究の一環として、2007年度から2017年度までに集められた中学生、高校生の職業レディネス・テストの回答を用いて、職業レディネス・テスト第3版の尺度としての信頼性および換算規準の妥当性を検討するための分析を行った。以下、中学生と高校生の分析結果を総合的にみながら考察する。

(1) 検査の構造に関する信頼性の検討

本稿での検証の第1の目的は、検査構造の信頼性の確認であった。具体的には、職業レディネス・テストに含まれる3つの下位検査（A検査、B検査、C検査）はそれぞれ尺度としての構造、信頼性の点で第3版から大きく変わっていないかが検討された。

検査構造の信頼性の検討では、中学生、高校生のデータを用いて、それぞれ職業志向性を測定するA検査およびC検査、基礎的志向性を測定するB検査の因子分析を実施した。

①A検査（職業興味）・C検査（自信度）の尺度構造について

まず、同一の54項目を用いるA検査（職業興味）とC検査（自信度）の結果を見ると、中学生、高校生ともに、C検査（自信度）に関しては第3版と同一の構造になっていることが

確認された。職務遂行の自信度に関する評定では、第3版作成時の構造が正確に維持されているとみることができる。

他方、A検査（職業興味）においては若干のずれがみられた。中学生では項目No.17「客を集めるため、広告や催し物などを企画する」という企業の領域（E）の項目が芸術的領域（A）にも高い負荷量を示した（.291）。高校生では中学生と同じ項目No.17に加えて、項目No.29「世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く」という企業の領域（E）の項目が芸術的領域（A）にも高い負荷量を示した（それぞれ.308、.258）。それ以外の項目は第3版作成時と同一の領域に分類された。

この結果を踏まえて考える必要があるのは、企業の領域（E）が上記2項目を含む本来の9項目で測定される場合、結果の信頼性が損なわれることはないかという点である。そこで、9項目による尺度としての信頼性係数（クロンバックの α 係数）をみると、今回のデータでは中学生、高校生ともにA検査（職業興味）の企業の領域（E）の α 係数は.83で、信頼性係数としては十分な値であり、これは第3版作成時と同じ値である。また、C検査（自信度）については、中学生、高校生どちらのデータでも α 係数が.85となり、第3版作成時の.86とほぼ同じ高い値を示した。したがって、No.17とNo.29の項目は、芸術的領域（A）に対する興味の高さとも関連はするものの、企業の領域（E）の他の7項目と一緒に当該領域への職業興味を測定する尺度として用いられる場合には、一定の信頼性の高さを保証していると考えることができる。

職業レディネス・テスト第3版の手引きに掲載されている尺度間の内部相関をみると（p.99）、A検査の芸術的領域（A）と企業の領域（E）の相関係数は.568で6領域間の内部相関としては最も高い値を示しており、このことから第3版の尺度構成では、企業の領域（E）と芸術的領域（A）に対する職業興味はもともと関連が高いことがわかる。例えば、No.17の「広告や催し物などの企画」やNo.29の「記事を書く」という内容が芸術的領域（A）に関心が高い生徒からも「やりたい」という反応を引き出している可能性はあると考えられる。職業興味の6類型と職業との関連をみたとき、企業の領域（E）では管理・運営に関連する職種、芸術的領域（A）では創造的な活動にかかわる職種ということで特性において異なる部分もある一方、両方に共通する要素をもつ職業も多数ある。今回の2項目もそれに該当する職業と考えられるが、C検査（自信度）で回答してもらおうと企業の領域（E）への負荷量の方が高くなっていること、企業の領域（E）の他の項目と合わせたときの α 係数は低くないため、現時点において項目の差し替えが必要なほどの不適切さは認められないと解釈できるだろう。

②B検査（基礎的志向性）の尺度構造について

B検査（基礎的志向性）の因子分析の結果をみると、中学生では64項目すべてが、第3版作成時に想定されている対情報（D）、対人（P）、対物（T）の各志向性と一致して分類された。各志向性の α 係数も対情報（D）が.81、対人（P）が.86、対物（T）が.80で第3版

作成時と同程度の値を示した。

一方、高校生では対物志向 (T) に想定されていたNo.30「自然公園やアスレチックに行くのが好きだ」という項目が対人志向 (P) にも高い負荷量を示した (.304)。この項目は対物志向 (T) の下位尺度を構成する「物をつくる」、「自然に親しむ」の2つのうち、「自然に親しむ」の項目として作成されたものであるが、戸外で身体を動かすレクリエーション活動のイメージが影響したためか、対人的なコミュニケーションを好む生徒たちも多く反応したものと推察される。

しかし、本来の対物志向 (T) にも同程度の負荷量をもつこと (.303)、他の項目とあわせた対物志向 (T) の α 係数をみると、.80で十分に高い値であることから、対物志向 (T) を測定するための尺度として、現時点における項目の差し替えが必要となるほどの問題点は生じていないとし、基本的には現在の項目での尺度構成が継続できると考えた。

以上の結果を踏まえ、職業レディネス・テスト第3版の尺度構成に関しては、一部の項目において多少のずれはみられたものの、尺度としての信頼性が損なわれるほどの問題点はなく、第3版の尺度構成の信頼性は保証されていると推察する。

(2) 換算規準の妥当性の検討

本稿の検証の第2の目的は、職業レディネス・テスト第3版において用いられている開発当時の中学生と高校生用の規準を、近年の中学生、高校生に対してそれぞれ適用して差し支えないかという点の確認であった。具体的には、第3版を作成したときに規準とした標準化集団の各領域の平均値と今回のデータの平均値がどの程度違っているかという点と、第3版公表以降の平均値の長期的な変化について検討した。

①各下位尺度の平均値の違いについて

中学生、高校生それぞれについて、今回のデータと第3版作成時の規準データの各領域、志向性の平均値をみてきたが、ここでは平均値の差が1.0程度見られた部分を取り上げて検討する。その理由は、職業レディネス・テストでは各下位尺度の粗点の合計得点を標準得点に換算するが、その際の合計得点の単位が1点刻みとなっていることによる。つまり受検者個人の採点を考えた時、粗点の合計得点が1点ずれるとそれに対応する標準得点が変わるので、6領域でプロフィールを描いたときに形状に何らかの影響が及ぶ可能性があるが、1点より小さいずれの場合には特に影響がないと考えられるためである。

まず中学生についてみると、今回のデータと第3版作成時の規準データの平均値が1.0以上違ったのはC検査(自信度)に関する中学生女子の芸術的領域(A)である。今回のデータの平均値が7.98、第3版作成時では6.93であり、今回の方が1.05高かった。したがって、もしも現在の中学生女子全体における芸術的領域(A)の自信度の得点が第3版を作成した時点での中学生女子の平均値よりも1点程度上がっているとするならば、現在の中学生女子の芸術的領域(A)に関する自信度は、職業レディネス・テスト第3版の換

算表を用いると本来よりも高めの水準で示される可能性がある。

一方、中学生女子の芸術的領域 (A) の平均値を長期的にみていくと 2007 年度から 7.86 と高めであり、2017 年度までの 11 年間にわたりほぼ同じ水準で推移していることから平均値の高さが近年の変化の傾向を反映しているとは考えにくい。また、自信度に関して 6 領域の平均値をみると、第 3 版作成時のデータと今回のデータの両方において最も高かったのは社会的領域 (S)、二番目が芸術的領域 (A) で一致しており、他の領域との相対的な得点傾向としては大きく変化していない。さらに、職業レディネス・テストでは、中学生、高校生という心身ともに大きく変化する発達段階の生徒を主な対象としているので、興味や自信度の得点の順位づけにはあまりこだわらず、各領域への興味や自信が高いか、平均的か低いかという傾向をみるような解釈を勧めている。このようなことを総合的に考えてみると、中学生女子の芸術的領域 (A) の得点の高さは、今後、継続して変化の方向性に留意していく必要はあるものの、現時点で換算規準を修正するほどの変化とはいえないと解釈した。

次に高校生の結果について検討する。今回のデータと第 3 版の規準データの平均値で 1.0 以上の差が見られたのは高校生女子の慣習的領域 (C) の自信度であり、今回の方が 1.08 低くなっていた。他方、1.0 以上ではないが、高校生女子の芸術的領域 (A) の自信度は今回の方が .90 高くなっていた。第 3 版の規準データの 6 領域の平均値と比較すると社会的領域 (S) が最も高いことは今回のデータでも同様であったが、両方を比べると 2 位と 3 位の領域が入れ替わっていた。これは 2 位と 3 位のそれぞれの得点が僅差であることによると思うが、第 3 版作成時のデータでは慣習的領域 (C) が 2 位 (6.17)、芸術的領域 (A) が 3 位 (5.38) となっているのに対して、今回のデータでは 2 位が芸術的領域 (A) (6.28) で 3 位が慣習的領域 (C) (5.09) となった。

高校生女子全体の傾向として、以前よりも芸術的領域 (A) への自信が高まり、慣習的領域 (C) への自信が低くなっているとすれば、第 3 版作成時の換算規準で換算した場合、芸術的領域 (A) は現在の高校生女子の規準で位置づけられる水準よりも高めに、慣習的領域 (C) の得点は低めに示されることになる。そうすると、自信度に関して上位領域の順位が多少入れ替わる可能性も考えられ、その結果、高校生女子全体として芸術的領域 (A) が高いタイプが増え、慣習的領域 (C) が高いタイプが減るということも起こりうる。ただ、前述したように職業レディネス・テストでは上位領域の順位にはあまりこだわらないように解釈を行うこと、さらに、高校生女子の自信度について慣習的領域 (C) も芸術的領域 (A) も長期的に見た時、2007 年度から平均値がほとんど変わらず、近年にかけての変化というよりは今回のデータにみられる特徴という可能性もあるため、第 3 版の換算規準の修正については、今後の変化の方向性を見極め、その変化の継続性と一般性が確認できた時点で行うことが適切と考える。

高校生男子にみられた研究的領域 (I) の平均値が職業興味や自信度において第 3 版作成

時のデータに比べて低めとなっていた点についても、長期的にみると今回のデータの平均値は 2007 年度からあまり変化していないことから、今回の平均値の低さは高校生男子全体の近年の傾向というよりは、今回のデータのもつ特徴が反映された結果とみることでもできる。過去に実施された高等学校に対する調査では、職業レディネス・テストは大学への進学率が高い学校での実施率が低いという記述もあり（大学入試センター,1991）、今回のデータについては回答校の進学率に関する情報はないが、今回のデータに大学への進学率が高い学校が多く含まれていないという偏りがみられるとすれば、学術的な分野への興味関心を示す研究的領域（I）への職業興味や自信度が低めとなった結果に影響している可能性もある。いずれにしても、この点については、分析対象校を広げるほか、今後の得点の変化を見ていく必要があるだろう。

②各下位尺度得点における経年変化について

2007 年度から 2017 年度までに各下位尺度得点が一定の傾向で変化しているかどうかについて確認した結果、中学生については、いくつかの尺度に関して、11 年間の前半と後半で得点の変化の傾向が見られた。特に特徴的であったのは中学生女子における現実的領域（R）の得点であり、職業興味、自信度ともに近年で高めに推移している。この他、中学生男子の基礎的志向性において対情報志向（D）、対人志向（P）が 11 年間の前半よりも後半の方で得点が高くなっている傾向がみられた。

ただ、これらの得点の変化は、11 年間を通した平均値と第 3 版の規準値との差が 1.0 未満という水準におさまっていることから、現在の換算規準の適用に影響を及ぼすほどの大きな変化とはいえない。また、高校生に関しては、複数の下位尺度で 2017 年度の得点が他の年度よりもやや低くなっている傾向がみられたものの、全体として規則的な変化は確認されなかった。中学生女子で近年高めとなっている現実的領域（R）の得点についても、高校生女子に関しては大きな変化は確認できなかった。また、高校生男子の基礎的志向性に関しても中学生男子に見られたような対情報志向（D）、対人志向（P）の得点に関して特別な変化は見られなかった。以上から、下位尺度得点の経年変化の検討においても、現時点では換算規準の見直しが必要な状態には至っていないと考えた。

なお、中学生女子にみられた職業興味、職務遂行の自信度に関する現実的領域（R）の得点の上昇傾向、中学生男子の対情報志向（D）と対人志向（P）の上昇傾向は、職業レディネス・テストの得点に反映される中学生、高校生の個性の変化を捉える上での今後の留意点として認識しておく必要がある。

例えば今回のデータでも確認されたように、中学生と高校生の女子における現実的領域（R）への職業興味や自信度は、研究的領域（I）と同じく、6 領域中、常に 5 位か 6 位の低い順位に位置づけられる。加えて、職業レディネス・テストの高等教育課程在学学生への適用への研究（労働政策研究・研修機構,2013）、および職業レディネス・テストと同じ職業興味を測る VPI 職業興味検査を用いた大学生女子の職業興味に関するデータにおい

ても、現実的領域（R）は他の領域に比べて最も低い得点となっている（室山・折谷・松本・宮崎,2001；労働政策研究・研修機構,2002）。このように、従来の研究は、女子の場合、「機械や物を対象とする具体的で実際的な仕事や活動」という現実的領域（R）への興味は低いことを示してきた。他方、男子においては、現実的領域（R）への職業興味や自信度は中学生、高校生ともに6領域中で最も高く、大学・短期大学・専門学校等の高等教育課程の男子学生においても6領域の中で高い方に位置づけられる（労働政策研究・研修機構,2013）。職業興味にみられるこのような男女差は、現実的領域（R）に関連する職業領域（例えば、動植物管理、工学関係、熟練技能、機械管理、生産技術、手工芸技能、機械・装置運転等）に従事する者には男子が多く、女子は少ないという状況につながる。

今回のデータに関していえば、現実的領域（R）の得点が近年高くなっている傾向は高校生女子には特に見られず中学生女子に表れているだけだったので、女子における現実的領域（R）への職業興味や自信度は年齢とともに徐々に低下することも考えられる。一方で、今回の中学生女子のデータにみられた現実的領域（R）の得点の上昇傾向が今後も継続するとしたら、長期的にみれば女子の職業興味の様相や選択する進路（卒業後に進学する大学等の学部学科選択や就職時の職種選択）の変化につながっていく可能性もある。こういったことを考えると、今回のデータで示された変化の兆しは今後も注意深く観察していく必要があるだろう。

（3）まとめと今後の課題

1974年に公表された職業レディネス・テストの開発当時の資料では、中学校や高等学校を卒業して就職する生徒の高い離職率を指摘した上で、これからの変化の激しい社会における進路指導では「生徒自身が自己理解を深めること」、および、「指導者は生徒をとりまく職業的環境を理解し、彼らの職業意識を正しく把握すること」が重要であると述べられている（職業研究所, 1974, p.1）。加えて、進路指導において活用される検査は、従来の適性検査が行ってきたように能力を中心とした特性を評価し、単に生徒の特性と職業とのマッチングに重点をおくのではなく、生徒個々人が職業的自己概念をチェックし、自分で考え、方向性を探索するための素材となること、受検者の主観を大切にし、受検者と実施者とのコミュニケーション場面で活用できることが重要であり、職業レディネス・テストはそのような要請に応えるものでなければならないとされている（職業研究所, 1974, p.2-3）。このように、職業レディネス・テストの開発の意図は、就職指導における適職斡旋のためのマッチングにあるのではなく、生徒の自己理解や職業意識の深化をはかり、生徒が教員とコミュニケーションをとりながら進路選択できるようなくみ作りにあったと理解することができる。

検査の初版開発から年月が過ぎるとともに、高等学校および大学等の高等教育課程への進学率は上昇し、中卒や高卒の就職者数は当時に比べて大きく減少したが、職業レディネ

ス・テストが現在でも広く活用されている理由の一つには、検査の示す結果が、就職希望者だけでなく進学希望者の進路選択や生徒たちのキャリア発達に役立てられる素材としても活用できる内容であることがあげられるだろう。

ただ、そうであるとはいえ、特に高等学校に関しては、職業レディネス・テストの実施校に偏りがみられることは事実であり、本稿のデータからも示されたように普通科高校よりも専門高校での実施割合が高くなっている。進路選択において生徒の適性を把握することの重要性は学校種に関わりなくほとんどの高等学校で認識されているが（労働政策研究・研修機構,2017,2018）、普通科を中心とした大学等の高等教育課程への進学重視の高等学校にとっては、この検査のように職業との関連性を意識づけながら自己理解をはかるような検査は、就職者向けのテストというイメージがあり利用されにくいのもかもしれない。

加えて、高等学校での進路指導における生徒の個性把握のための職業適性検査等の利用については、職業レディネス・テストに限らず、委託業者によるテストの集団実施や業者によって採点された結果の返却が検査実施形態の多くの割合を占めているのが実情であり、教員自身が検査をうまく活用して生徒の進路選択を支援しているケースは必ずしも多くない（労働政策研究・研修機構,2017）。このような利用状況をふまえると、職業レディネス・テストは多くの学校で実施されているとはいえ、検査が本来目指している有効な活用方法の実践は未だ十分とはいえない。

今後、改訂を重ねながら職業レディネス・テストを維持、普及していく上で、信頼性、妥当性を定期的に検討し、測定尺度としての精度を保っていくことは開発者としての責任であるが、それと同時に、検査の目的、有効性、活用方法を学校側に正確に伝えるための効果的な手法を検討していくことも重要な課題である。そのためには、進路指導での具体的な活用事例や結果のプロフィール解釈のポイントの紹介等が盛り込まれた活用事例集をまとめることなどを通して、現場の教員が検査を一層活用できるようにするための効果的な方法を示し、発信していくことが必要である。

例えば、近年は、高等専門学校（以下、高専）において入学後に専門教育への不適応が生じた学生に個別に対応するための相談で職業興味検査が用いられたり、キャリア教育の一環としての学習に対する目的意識の促進のため、低学年のうちから実施されるプログラムに職業興味検査の利用が組み込まれたりしている。高専での実施の場合、高等教育課程の学生を対象とした職業興味検査である VPI 職業興味検査が用いられることが多いが（佐々木・国重,2002）、低学年で実施する場合には、具体的な職務内容の記述がある職業レディネス・テストの方が適切ではないかとし、職業レディネス・テストを用いて学生の職業興味とキャリア意識の発達の関連を検討した報告もある（萩原・畔田,2017）。今後は、このような研究報告や学校での活用事例を集め、現場での有効な使い方について検討することも有効であろう。

なお、高専での検査の活用にも関連するが、将来に向けたもう一つの課題としては、大

学生等の高等教育課程の在學生に対して検査対象を拡大するための条件や内容の検討がある。職業レディネス・テストの換算点は中学生と高校生の2つの規準集団に基づいて作られていることから、厳密に言えば、中学生、高校生向けの検査を大学生以上に適用することは適切ではない。しかし、職業レディネス・テストの場合には、「20歳前後の者であっても職業経験の少ない者あるいは全くない者や職業に対する知識が乏しい者あるいは知識に極端な偏りがみられる者には、他の成人向けの検査を実施するよりも本検査を利用する方が適切な結果が得られる場合がある」（職業レディネス・テスト第3版手引,p.14）とされ、応用範囲としての検査の適用が認められている。そのような場合には高校生用の換算規準を用いて換算点を算出することが手引に記載されているが、この方法は、職業レディネス・テストの結果を高卒以降の学生の職業意識の発達をおおまかに捉えるための便宜的な措置である。

ただ、近年は高等教育課程への進学者の増加やキャリア教育の一環としての検査の実施が増えてきたことを背景として、高等教育課程の学生への検査の適用も多くみられるようになってきた。そこで、高校生用の換算規準を大学等の高等教育課程の学生に適用することの妥当性に関する統計的な裏付けが必要という観点から、大学、短期大学、専門学校に在学する学生のデータに基づいた検証も行われた。その結果、大学生に対して高校生の換算規準を用いると、大学生の方が高校生よりも平均値が全体的に高めとなっているため、本来の大学生の集団内で換算されるよりもプロフィール全体が多少高めに位置づけられる可能性があることがわかった。しかしながら、高校生の換算規準を用いても、プロフィールの上位にくる領域が大きく入れ替わることはなく、上位領域を用いて行う最終的なプロフィール解釈上で大きな問題は生じないことが確認されている（労働政策研究・研修機構,2013）。

このように、高等教育課程への学生に職業レディネス・テストを適用することに関しては、確認のための統計的な検討は行われているが、現行版の検査を大学生等の学生に適用する場合には高校生の換算規準を用いても差し支えないという範囲にとどまっており、現時点では大学生等向けの換算規準が明示されているわけではない。また、上記はあくまでも高校生の換算規準を適用することの妥当性に関する検討であり、大学生等の職業レディネスの測定に、今の職業レディネス・テストの内容が適切かという点に関する検討は未実施である。したがって、高等教育課程の学生に対する検査の適用については、換算規準の問題とともに、大学生等が使うことを考えた場合に現在の職業レディネス・テストをそのまま用いることが適切かなど内容面に関する検討も含めて、今後、改訂に関する研究会の中で十分に議論し方向を定めていく必要があるだろう。

参考文献

- American Educational Research Association, American Psychological Association & National Council on Measurement in Education. (2014). Standards for educational and psychological testing. American Psychological Association, Inc.
- 大学入試センター (1991). 高等学校の進学指導における個性尊重に関する調査研究報告書—偏差値を主とした進学指導の改善を中心として—
- 萩原俊彦・畔田博文 (2017). 高等専門学校 1 年生の職業興味とキャリア意識—VRT と CAVT を用いた検討— 日本キャリア教育学会第 39 回研究大会研究発表論文集, 42-43.
- Holland,J.L. (1985). Making vocational choices. Psychological Assessment Resources,Inc.
- 文部科学省 (2006). 「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引 —児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—」
- 室山晴美・折谷妙子・松本純平・宮崎利行 (2001). VPI 職業興味検査の改訂に関する研究, 日本労働研究機構研究紀要, No.22, 1-26.
- 日本テスト学会 (編) (2007). 「テスト・スタンダード—日本のテストの将来に向けて」 金子書房
- 労働政策研究・研修機構 (2002). VPI 職業興味検査 第 3 版手引 雇用問題研究会
- 労働政策研究・研修機構 (2006). 職業レディネス・テスト第 3 版手引 雇用問題研究会
- 労働政策研究・研修機構 (2007). 中学生、高校生の職業レディネスの発達—職業レディネス・テスト標準化調査の分析を通して— 労働政策研究報告書 No.87.
- 労働政策研究・研修機構 (2013). 職業レディネス・テスト第 3 版 大学、短期大学、専門学校等での実施のためのガイドブック 雇用問題研究会
- 労働政策研究・研修機構 (2017). 高等学校の進路指導とキャリアガイダンスの方法に関する調査結果 JILPT 調査シリーズ, No.167.
- 労働政策研究・研修機構 (2018). 若年者就職支援とキャリアガイダンス—個人特性に配慮した進路選択の現状と課題— JILPT 第 3 期プロジェクト研究シリーズ, No.6.
- 佐々木伸子・国重 徹 (2002). 高専における学生相談の具体的活用策—心理検査を利用したキャリア・ガイダンスの試み— 高専教育,25,461-466.
- 職業研究所 (1974). 「第 I 部 職業レディネス・テストの開発」 研究紀要 No.7, Pp.1-26